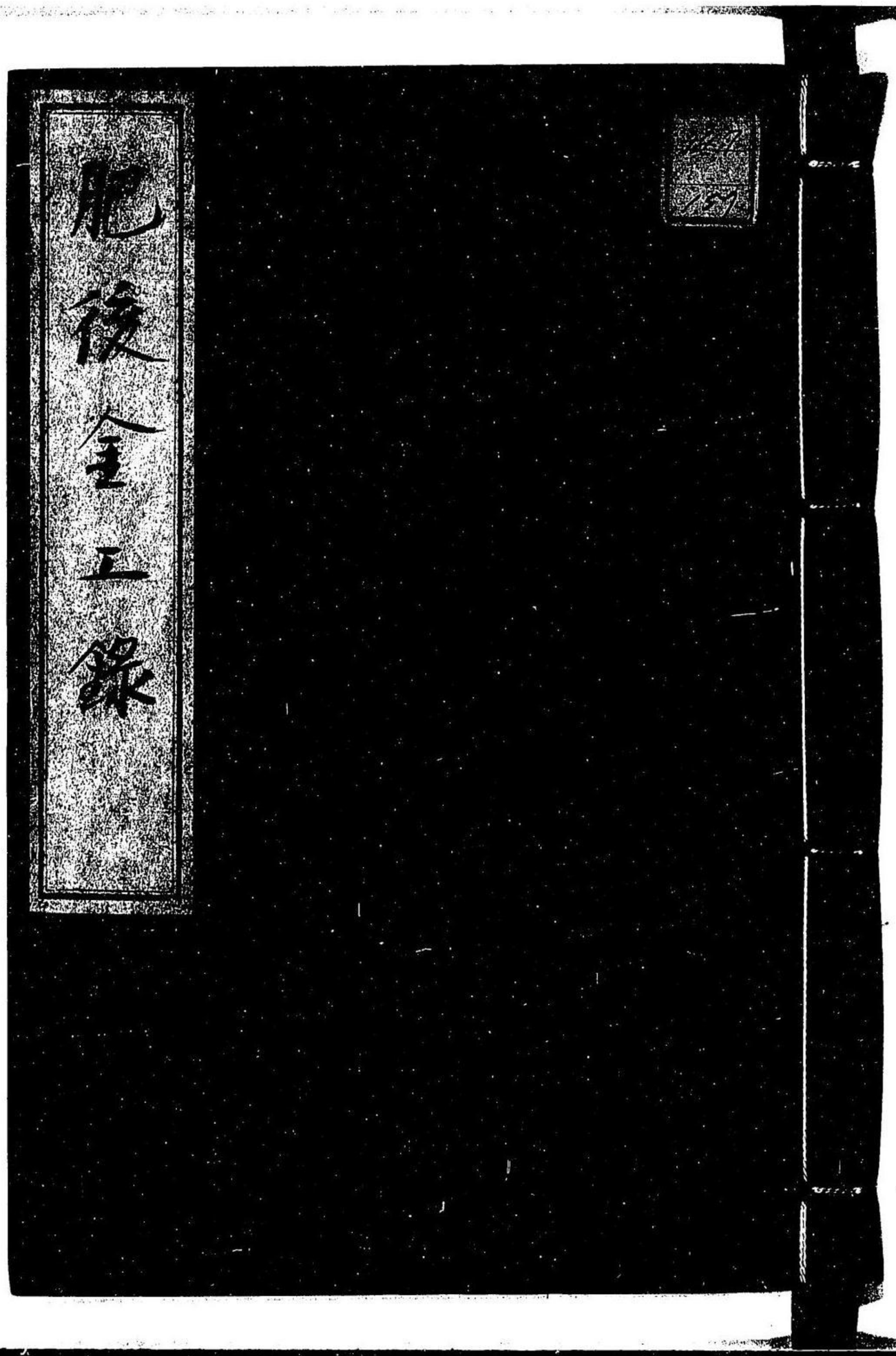


072248－000－1

147－157

肥後金工録

長屋　重名／著

M35

CEF－0150

147
1
157

食金工錄

30.6.20

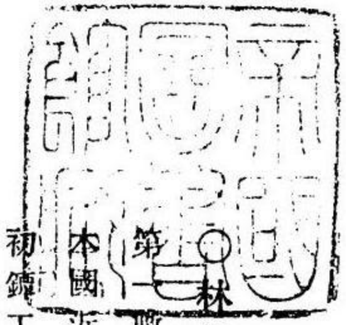
昔我南海舊藩のとき少壯黨輩中特に某々等相好みて肥後刀を鞴造せり予亦其一人たりき抑所謂肥後刀なるものは三齋細川公より始むること喋々を要せずといへども其製の品位如何に在ては專ら屬具の適否に關すこと是豈講ぜざる可けんや然に當時予輩外藩の士にありては或は幸に其一臠を試るも奈何せん全鼎を窺ふに由なく常に以遺憾となせり明治初年以來予西遊數々該地に入るといへども勿忙の際復金工の事に及ぶに遑あらず越て十六年の夏月又赴くや餘暇を以て其見聞を貪り且分に隨て收拾をも勉め爰に多歳の宿念を果さんとす因て該作の品等及作者の系譜等を錄取し以て備忘に供せり今玆齋らして東京に歸り試に同好に示す幸に其贊

成を博し竟に此編をなすに至る予嘗世間此類の書物を閲するに往々口傳あり云云又見所あり云々是等漠然たる語少なしとせず殆看者をして五里霧中に迷はしむ因て窃に疑ふこれ編者の秘訣即ち遁辭に過ぎざるべしと予は此編を草するに臨み先こゝに注念を加へ努めて實錄を期したり然に記するに際し間々誠に筆に盡しがたきものにあふ終にかの顰に倣ふの止を得ざるに至る請ふ看者幸に予が前人の著述を疑ひし疑を生ずる莫らんことをこのころ聞或人此著を難し曰今や刀劍已に廢棄殆玩弄物に過ぎず何ぞ復金工を論ずるを要せむや此編到底無益に歸すべしと又某氏あり曰斯の如き金工亦美術の一に居る其古今名技名作を彰はしこれを世に紹介するは其意深切決して無益の事にあらずと二說相反す乃此の如し然るに世自から公論あらむ予は必ずこれを辨ぜず但予元遠地の生産にも拘はらず該地特有の名技に對し口づから評論すら猶且妄なるを恐る況や之を筆記するをや又況や僅々數年間の淺見に過ぎずその所謂半鼎だも猶未嘗め盡すこと能はざるに於けるをや杜撰の責を免かれざるべし特に同好君子の是正を竢つと云爾

明治十九歳勉東京の市谷の寓居にむるて誌す

肥後金工錄

土佐 鐵網海客著



第一 敗枝重政（藤原座守と稱す）

本國近江神崎に住す足利公に仕へ文龜年間知行三百石を領す

初鐵工たり鐵砲始て渡り爾來鐵砲師となる

享祿四年打死（何役たるや分明ならず）行年二十七歲

第二 源左衛門重信

豐臣公に仕へ知行三百石を領す尾州中村に居り後播州に移る時に加藤清正公の所望に依り轉仕す播州高取備中冠賤ヶ嶽等の諸役に出づといふ

天正六年肥後國へ下る

此作有無分明ならす
寛永六年死年齢其他詳ならす
第三八助重直
肥後飽田郡横手村に住す後忠廣(加藤)改易に依り浪人となる其終を知らす
この作も分明ならす
第四又七(春日初代)重治後重吉實は清兵衛二男(清兵衛詳ならす或は源左衛門の初名か)
細川公に仕へ鍔工専門に復す廿人扶持を賜ふ初捧安坂大木氏の家に寄宿す(案するに加藤氏改易後浪々となり此際大木氏は加藤の老臣たる由緒を以て身を托し後大木か細川公に仕ふるに當り随て出身せしものか)後春日村に住す代々此に居るを以て春日鐔の名あり
清正公相傳南蠻鐵明珍の名附源左衛門より受くと其家譜に見ゆれども詳ならず

此作肥後金工第一等と稱す鐵及銅赤銅四分一等諸作あり就中鐵色は絶類にして其地合のしまりよく麗はしき事は譬へんにものなし又布目象眼は盡く精妙を極め又彫込象眼は雅致あり共に絶品なり但据物はいまた見す
鐔の在銘は林又七或は又七と多くは金もて入る又林又七重治作と長銘もまれにはあるも概して無銘物たり其縁頭類にもまゝ在銘もの見ゆれど大抵は後入の如し
鐔の式に至ては透、板、共各種あり但アヲリ形と環耳とは見へす象眼は二重唐草、枯木、桐、葛繋き、渦、等は最著名なりまゝ綸子、綱目もあり又一種ホツレ象眼は(ホリ込)妙也(龍は春日代々なきか如し)就中二重唐草は極て細かき針金にて入る精工いはんかたなし二代以下及他家の夢たも見る能はさる所なり
象眼は大抵焼金を用ゆ別して艶あり枯木の如きはホリ込に作り鑢底

張りに切る故に金色最深くして奥ゆかしく見ゆ(二代以下は概して金色劣る)

有名なる肥後三枚と唱へる九曜櫻紋透しの鍔あり嘗其二枚を觀るを得たり眞に非常の作にして透の精工なる先驚くべく象眼の綿密なる更驚くに餘あり三枚中二は地象眼二重唐草にして他一枚は綸子たり其圖下の附圖の部に出す

此作總て精工を貴ふ中にまゝ壯年の作こて稍粗の如きも見ゆ(重に透鍔)多は鑽透なれは輕々見れは或は初代勘四郎作かこ誤るべしされこ諦視すれは粗のこゝく見ゆる所ろ即其力の所にて迚も〳〵他作の及ふへきにあらす又壯年の作こ一概に極めかたし鑒定家注意を要すへきは專ら此等の作行に在る如し

緣頭鐺等の作行も他作こは特別にして其式は色〻あれこも先第一しまりて強く頭には袴腰、丸形、緣には蟻腰、樋、等は通例なり鐺の式は一定なかるへし重に深き泥摺の類ならんかこれも甚稀なり又異體の頭は多くは銅及四分一にある如し或は結ひ、或は行合、或は鼻クリ、形の類にて大かた玉緣を付す其上に鋲を打つもあり鋲頭長きも眞丸もあり鋲端裏迄貫きたるかたなり(他家にも鋲の式あれこも大抵玉緣際に打つ例にて玉緣上に打つはいまた見す且鋲首眞丸にして稍小きものこす)

又緣の仕掛は沸し繼き蟲繼二法あれこ多くは沸し繼のかたなり又緣金は惣して薄きかたにして形は長からす(勘四郎作の如くに)試に緣の小口より底のかたを(天上金に至る)のぞき見るに裏行あらはに見ゆるはあしゝ正眞の作はごこやら奥深く覺ゆるなり此獨又七に限らす肥後名作の緣はいつれも同し

緣金の繼き目肥後諸家皆沸し繼にて造る但し前にもいふ如くこかく及ひかり故に僞作にも大かた蟲繼に造るこいへこも獨春日には蟲繼あたき所はしまりに在り且繼目の力金の所にも見所あるへし

布目象眼は肥後諸工皆あり中に八代作は最名代なり然とも矢張此作を以第一となすそは又七象眼は疎密に拘はらす沈着して浮き出る如きはなし中には手置のあしきに依り脱けたるもあれと痕跡に就て能見れは他家と異る所自から判然たるへし

某氏の藏鐔に金布目を以敗扇と散櫻とを造るあり(又某にも同一の作を藏す一は丸形一は木瓜形にして小透及覆輪あるを異とす)此作行異例の如し極めて厚き象眼にして一寸見れは据物かと思ふ計なり又或は正阿彌の作と誤るへし名家時にこれあり眞に量り知りかたし然とも其實矢張掟は扇の骨と櫻及ホッレ象眼の處に於て顯る(丸形最佳作圖下に出す)

馬針は殊に乏しきもの也正眞の作とてはいまた見す聞く細川侯の藏に一本ありと(象眼二重唐草)他にも名たけ高きものあれと皆疑ふへし其或藏品の如きは熊本第一の如くはやせとも一見正阿彌の作にていつの時なるか未熟鑑定者か妄に取り極めたるに過きさるへし大抵皆此類と知るべし

又七の妻は法橋來國次の女なり(國次は當時の刀匠なり)一日國次又七のもとに到り其鐔の作を見て大に嘲り謂ふ汝か鐔いまたきたひ足らす余か鍛ひたる刀を以てすれは忽切るへしと又七年若なれはやつきとなり即答に能切るなれは切りて見よと國次切りけるに果して截れたり是に於て又七大に愧ち後鍛錬法を嶽父に受け益精妙に至るとそかゝる苦辛研究の上なれは地極めてしまり鐵色の美なる誠に他作の及ひかたき所とす(又七元來鐵砲師より出つ其地鐵のしまり已に尋常金工の類にあらさるへし況や刀匠の傳授を受けたるおや宜哉其二代以下他家皆及はず)餘は總論に讓る

慶長十八年生元祿十二年八月廿六日死行年八十七

二代目(春日二代目也以下之に準す)藤平重光

五人扶持切米拾五石

此作概ね初代の掟に依るといへども却て雅趣ありゆゑに精密の作もの
のは寧ろ乏し重に透鐔にて板及象眼ものは甚稀也紋透も種々あれど
初代の品格に及ひかたし其笹蟹武藏野桐等の作の如きは往々初代に
迫るものを見るこれ平生得意のものか枯木象眼も曾て一見せり銀以
て入る(初代には銀は見す)枝幹とも針なく枝は稍長く且低れたるかた
也或は彦三の枯木に近し此作行初代より下るは無論なり然り亦自か
ら賞すへし鍔の作在銘多し通例は表に縁と切り裏に重光と楷書にて
切るまゝ縁までも表に切る金銘なるはいまた見す
二代は自ら二代の價ありて亦上手なり吟味の足らさる昔にては初代
の作として通りしもの頗多しとそ
縁頭鎚等の作さたかならす從來春日作にて初代迄上しかたく又三代
には過きるとなす作容易に此作に極める弊あれと其二代は自ら二代

の地鐵等ありて決して混評すへからす

寛文七年生延享元年五月十六日死行年七十八歲

三代目藤八重吉後房吉又重方

五人扶持(以下代々祿同し)

此作總て家法を株守す亦一代の上手の名を博したるのみならず一時
は二代より勝る如き好評を得るに至るといふ(其實二代より劣る其象
眼ものを多く造り時好に適するゆゑに此評ある以所か)

此作密なるもの多しこれ其初代の衣鉢といふ所なるへきか霞櫻薇手、
透等の如きは大かた葛菱を入る手際甚美にして初代の風あれとも其
霞の透方譬は初代は細毛髮も雷ならさるも此作は棕梠の毛の如しこ
れも其及ばさるの一證ならむ

象眼中カツラ菱は出來よきは初代に迫るといへど能く見れは殆死生
の差あるへし初代には變化あり此は大抵同一物を聯り盡す酷評すれ

は紺屋の形の如し張金も肉太きに過く鐔の式多くは町人好みに入るへき様のものあり勝とす惜むへし(縁頭の作も亦同し)

享保八年生寛政三年八月朔日死行年六十九

四代目平藏重次

延享元年生天明四年七月死年四十一

五代目又平重久重之又源保之と銘するは同人との説あり

明和七年生文政六年十一月死年五十四

六代目又八前名武兵衛

天保十一年八月死

七代目藤七

明治七年六月死

八代目即當代百雄

以上は春日の歴代たり然れとも其の著名なるものは三代目迄とす以下代を追ひ分ち評するに足らすすへて略す

三代以上の作行に就き猶細評を加ふへし初代は鐵色黒き中に紫光を帶て深し二代目はこれに亞くも稍上は色の氣味を免かれす三代目に至て漸赤味を呈す如し

鍔の切羽臺も代を追ふてあまり方減す其櫃穴亦然り

初代の鐔の肉置にまゝ厚きに過る如きあれとたとへは他作の如き水腫に似たるはなし所謂肉は骨を包むなれは骨の組織如何に關係すへきは勿論たり只初代に限り必す骨肉よろしきを得るなり二代の初代に及はすといふも重にこゝにあるへし三代の二代におよはさる亦然り概して二代目は骨稍肉に勝ち三代目は骨小なるに拘はらす常に肉過る如し其透物におゐて最此病を認む

三代目の象眼に就き猶又補ひいふへし大かた姿よく造りたるもたゝ足さる所は精神に在り今試に畫を借り評せんか彼古法眼の彩色に倣

ひたる末狩野の筆に於ける如し徒に其家法墨守故に先形似を勉め人物花鳥一見皆能摹したるを認むも奈何せん板病を免かれかたし是他なし精神至らさるの責ならんか春日三代目の作は猶末狩野の畫と同斷こいふへし更に酷評するときは婦女子の好に入ものこいはんのみ四代以下は取らす然共名家の末況や連綿大諸侯の工人たれは時々の作は勿論其他諸方へ贈進物の作類多くあるこゝそ縁頭及鎚等の諸式概ね左圖の如し但專ら初代の作を擧く

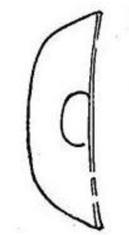

袴腰形

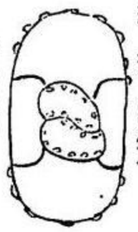

同
尚深キモノモアリ

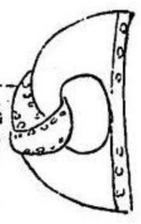

舟底形

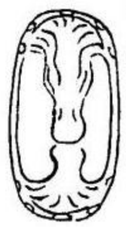

袴腰
雷門毛ホリ


丸形


同


結形 四分一
線鉄赤銅


同
毛ホリ


行合浪 四分一

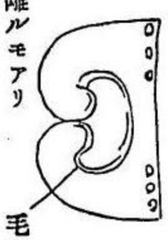

同
此處着モ離ルモアリ
毛ホリ


丸形一種


眠鴉 四分一 ホリ片切


鼻クリ形


又一種 綸子金布目象眼


又一種 銅鉄赤銅
毛ホリ


袴腰一種 尖ル方

袴腰、丸、舟底、鼻操、等ハ專ラ鐵ニアリ浪鴉又袴腰ノ雷門ヘリノ如キハ多ク四分一銅等ニシテ銀赤銅共ニ見ス鉄ハ專ラ白眼モノニ打ツ例ナリ
因ニ云西垣ノ鴉頭ハ鐵ニアリ或ハ金以テ眼ヲ入ルアリ作行自ラ別ナリ


通例縁
肉沿平ノ方


蛾腰形
肉沿丸ク強シ

マヽ天地縁ノモノアリ
肉沿丸ク且深シ

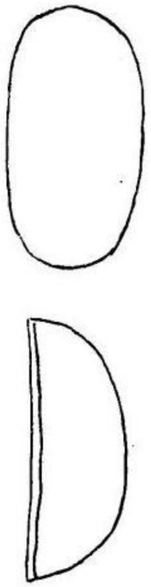
枯木金彫込象眼或ハ又桐等モアリ

樋形
此式世珍重ス

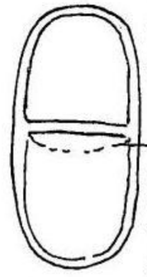
天上金 銅ニシテ縁金ト平ナリ

天上共金ニ作ルハナシ

泥摺鐙　深ク丸キ方　同

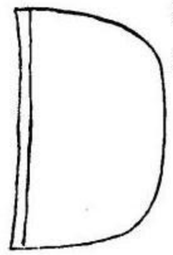


泥摺裏行　力金底ニ着モ着セサルモ共ニアリ又マヽ二行ノ式モ見ル



因ニ云泥摺ノ一種巾狭ク長ク痩タル形モアリ多クハ舟底形ニシテ力金ハ棒ナリコレヲ帆柱形ト稱ス最得カタシ其何人ノ作ヤ知リカタシ或云春日初代ヨリ古シト御家刀拵ニ於テ珍重セラルモノトス

袋式　同



袋鐙ハ初代二代共正眞ハ見ス此ハ三代目ノ作行ヲ示ス



世ニ三代目ノ作ト稱シ櫻或ハカツラッナキ等ノ象眼鐙マヽ見ルト雖大抵ハ疑フベシ其給子又七寶雷門ノ如キハ最信シカタシ從前ハ諏訪幾平神吉祖父又ハ谷清兵衛ノ作等モ春日象眼ニ擬シタルモノハ勿モスレハ三代目ノ作トナセシトソ

同舟底式　淺キ方



緣際肉置最強シ

同　鋲ナキモアリ又及宗共鋲打ツモアリ但共金ナリ



因ニ云鋲ハ諸工銀以テ打例アレト金ハ絕テナシ

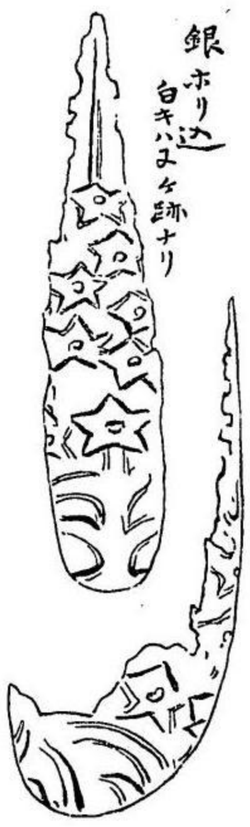
末春日も概ね以上の式なるへし又諸家にも同式を以て造るもの甚多し猶色々あるへきもこゝには有名にして正眞のものを示すのみ神吉

樂壽舊愛にかゝる有名の不知火頭あり袴腰式にして形最強く眞に二あき作こす誠に賞すへし又余か愛藏にも絕品の鐙あり二品特別に左に圖す



火金ニテ入ホリ込ナリ白キハヌケ跡ナリ

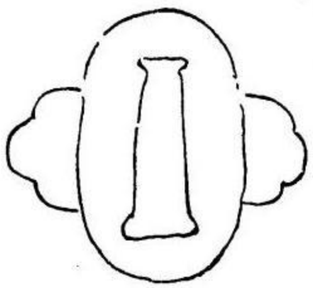
泥浪ホリ上最淺シ其浪ノ模糊タル所即夜景ヲ寫シ尤妙トス



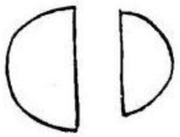
銀ホリ込白キハヌケ跡ナリ

鍔の切羽臺幷に櫃等の事は已に荒方述へしか單に形のみを唱ふときは代々左迄の差なき如しといへとも其實大にあり三代目の如きは臺の四隅稍張るくせも見ゆ大略左に示す

初代

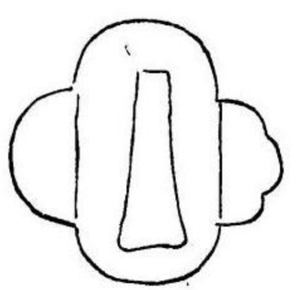


同



以下片櫃ヲ採リ集メ圖スルモノ

同

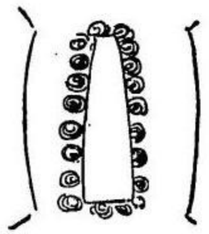


同



初代作ニハ毛ホリ如此殘ルモノアリマヽ二代ニモ又西垣初代ニモ見ル

同

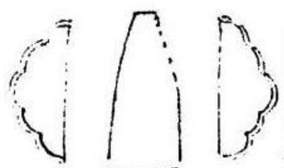


渦タカネハ至テ稀ナリ

同

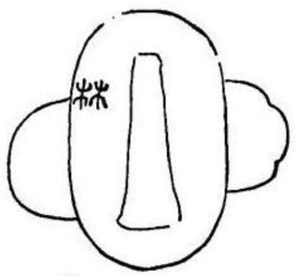


此式初代以下皆あり



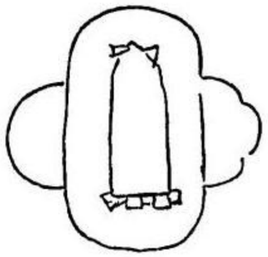
毛ホリ肉代々差あり三代目は肉稍大なり

二代目



ウラ 重光

三代目



中心穴際ノ刻印代々種々アリ一定セス但三代目ハ多ク圀ノ如キ印アリ然ニ神吉祖父ノ作ニモ徃々似タル印ヲ見ル

○平田家

元祖松木因幡守

江州佐々木氏の族たり佐々木没落の後浪人となる京都におゐて細川三齋公に仕へて丹後に隨行し知行百石を受く慶長年間石田三成兵をやり田邊の城を攻む因幡守防守能く力む後細川公豊前に入り爾來の

忠節を賞し知行三百五拾石を賜ふ
妻は小侍従と稱す明智日向守より秀林院(三齋公室)へ付人の女房ときい
ふ嫡子彦三幼年なるを以て甥松本助之允相續をなし祿二百石を賜ふ
其終を知らす

初代平田彦三平田と改姓の事由詳ならす
別祿百石を給ふ(案するに松本氏家祿の別なる如く又同時に革姓別戸
に立もたらんか又一說に彦三豊前小倉におゐて武家奉公辭退し細川
公の特命に依り更に金銀鑑定の事を司るともいふときにかく彦三は松
本氏の子ならん然ども別祿云々見へ且因幡守助之允共に金工の事見
へす依て彦三を以て金工平田家の初代と稱すへきなり
此作行春日とは別趣なり地鐵強くかつ澤あり鍔の式は木瓜形、丸形、長
丸形等種々あり其櫃の式概ね大形なり又地燒手クサヲシを用ゆもの
多し時雨、丸線(ロクロにはあらず)等掟なり鍔の作地金烏銅、眞鍮、銅、の類

最多く鐵地は割合には少なし總て古意ある作行にして絶へて俗氣な
し其薄出來には古正阿彌の作の如き又或は三齋公作の如きものもあ
り概して品格高く見ゆ尋常工人の作と異る所以なり
地透物中丸曜櫻の如きは通例あり普通透鍔は稀とす象眼ものは金銀
布目ケシ込ミ眞鍮地赤銅ホリ込象眼其唐草は勝れて見事なり此法は
肥後諸工絶て見す蓋甚難きものなりとぞ又象眼中物形、分明ならさる
ものあり是を塵紙象眼といふ甚雅趣あり蓋春日初代得意のホツレと
異法同趣なる如し
枯木は一種の法にて枝幹共に針を設けすこれ却て雅なり据物はいま
た見す初よりなきや又彫は大小精踈種々あり多くは草々と片切彫な
り重にタカヲ大ある方又一種殊に大肉片切も見ゆ
此作地金の何に拘はらず覆輪鍔多し至て見事にて就中小田原覆輪の
如きは獨歩と稱す又細き打返し耳も能作る(神吉樂壽常にいふ他作の

覆輪は之を脱して撿するに耳甚疎略かスリ直しものにあらさるは殆なし獨彦三の作は元覆輪を取る前におゐて十分仕上げ而して後掛けたる事にて他作と異る所以なり故に往々覆輪脱しのまゝ用ゆるに足るなりと

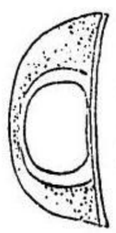
縁頭の作は彫及象眼共にあり重に毛ホリとす(地石目多し)櫻花、唐草、時雨、渦、等又立浪のホリ上皆掟ものなり(立浪は世久しく勘四郎を以第一となす即勘四郎浪の稱あり其浪頭に一種の毛ほりありてこれを特有の如くいへど何そ知らん彦三精作には已にこれあり勘四郎は恐らくは彦三法に習ふものと神吉の説ありき)又彦三浪は腰稍高く勘四郎は低し彦は高き故に下張り勘は低きゆゑに横張るかたなり

此作在銘は絶てなくして獨其末に傳へる有名の三光の鐔にあるのみ其圖下の圖部に出す

縁頭及其他の式慨ね左圖の如し但縁頭は過半白銀ものとす


丸形 深キ方


ナツメ形 長キ方

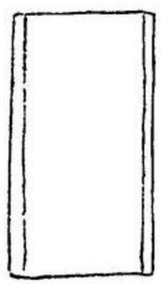

鼻クリ形 四分一


樋形 樋底ノ深キ方 真鍮赤銅象眼但葉銀

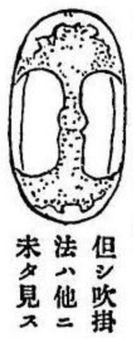
同 玉縁ホリ上細キ方


同


半太刀頭 烏銅


半太刀縁 最深キ方

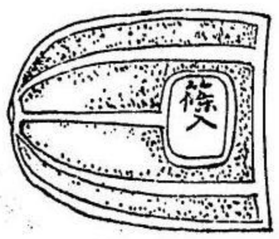

狩腰形 小キ方 毛ホリ


行合浪形 銅地銀吹掛 但シ吹掛法ハ他ニ未タ見ス

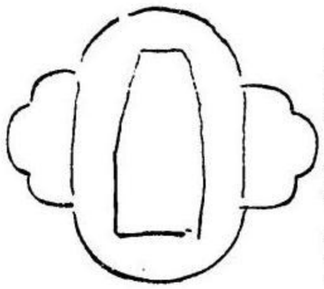

同 玉縁銀ニテ入


同

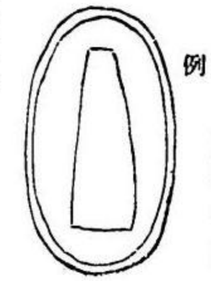

同 鉄銀ナリ小キ方



異体深頭 銅筋赤銅ニテ入

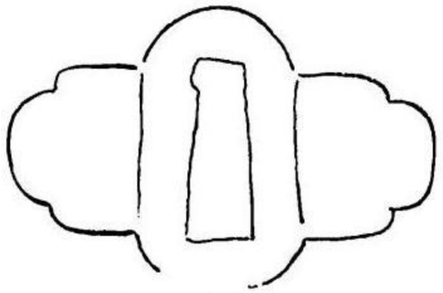


戸樋形
上下線ノモノモアリ



例

洲濱樋
此式西垣ニモアリ但シ肩及脚ニ見處アルヘシ

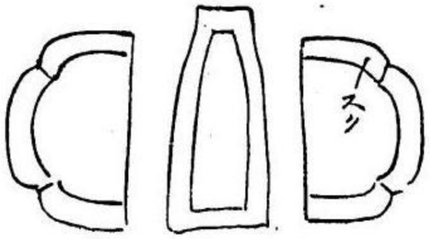


此式ハ專ラ大透モノヽ内ニ付ス譬ヘハ扇地紙ノ如キモノヽ内部ニ設クナリ

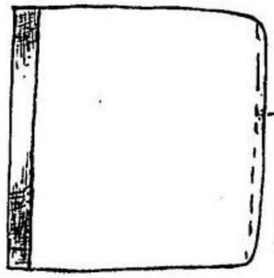


蛾腰形
銅渦時雨共ニ彫最深キ
モアリ

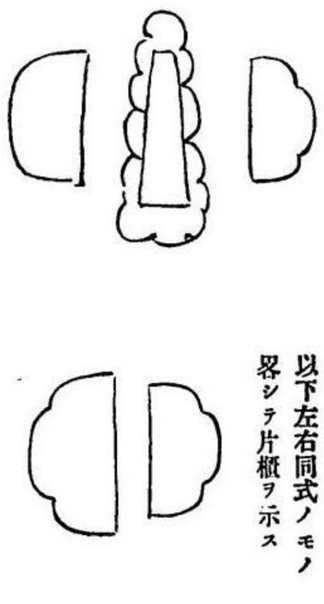
線金厚キ式



スク



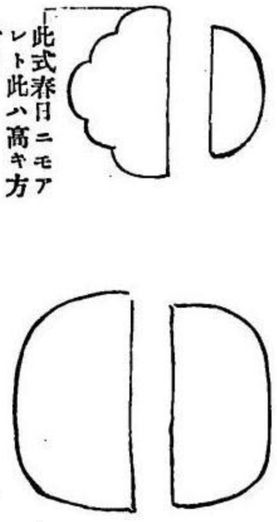
袋鐙 鐵
肉置キ角丸ノ方
玉縁金布目象眼



以下左右同式ノモノ
器シテ片樋ヲ示ス



此式專ラ大鍔ニ於テ見ル
但シ片樋モノ



此式專日ニモアレト此ハ高キ方ナリ

如此刻印ヲ打ツモアリ從前ハ此ヲ遂ニ限ル如ク云ヘトモソハ妄ナリ專日及西垣ニモマヽ有之又他國作ニハ少ナシトセス余カ藏品中此印アル遂ニハ十中三四ニ過キス又此印ヲ付シタルモノニ多ク僞物ヲ認ムルコトアリ吟味セサルヘカラス

以上諸式專ら初代を摹す二代以下亦此に出てす略す
太鼓緣は肥後諸家皆あれど(專日には稀)此作には絶て見す馬針小柄笄
類亦見へす鍔の圖下に示すへし
寛永三年十一月九日死年齡詳ならす

二代日少三郎
（合力米貳拾石
此作總て初代に據るといへども大に劣る依て略す
三代日彦三實ハ芳賀某ノ三男
以下連綿當代彦三に至り八代目となる此間作の記すべきものなし代
によりては總て無作とも云ふ
初代は流石に武門程ありて作物總て氣高く見ゆ勘四郎及甚五の如き
名手皆此門より出つ其將に將たるの技倆知るに足るへし肥後諸家春
日初西垣八代共に初代以下三代目迄上手と稱す獨平田は初代一人に
止り二代以下名絶ゆ（初代には香はしき武談あれど此に要なきに付略
す）

○西垣家
初代勘四郎吉弘

丹波國内外宮の神官某の子なり（鑿工譜略には土州の産とあれど誤り
なり）平田彦三の門人となり三齋公に仕へ肥後下國因て貳拾人扶持を
給ひ八代に住す
此作鍔緣頭等諸作殆あらざるあし最緣頭に工にして世勘四郎緣の稱
あり（今存在の作緣多く割合に頭少しゆゑに緣の稱あるにや其頭は通
例長ナツメ形にて時好に合はす故に捨たるもあるべし緣の式も他家
よりは長目なり後世は直して用ゆるなり）
地鐵は概ね其師彦三に近きといへども稍サツクリとする心ありまゝ
これに反し鏡面の如きも見ゆ
据物象眼彫透の諸法いつれも見事なり殊に勝れたるは緣の作なり又
七こいへども一歩を讓るものありこれ等は重に精密の作に在る如し
鐔の形は大かた丸き下張りに作る眞丸、及アナリ形、木瓜、等は稀其ヱフ
ゴ、異風巴、扇透等は掟ものとす又ヱフゴ、異風巴、ともに多くは唐草を入

る(象眼金色稍下の方銀は稀なり)其法は平田にもあらす春日とは又大に異る第一張金は稍肉フクレ勝手にて且浮き出てたるこゝろあり又葉先幷に蔓におゐて見所あるべし
透鍔亦工にて式は種々あり桐、松、梅、菊、等多く見るまゝ又七の壯年作に髣髴たるもあり然に細に見れは第一其櫃の式又耳の法異れり(耳櫃肉置多くは尖り勝手なり)
眞鍮鐔には名作見ゆ(銅は未見す)ホリ上、ケシ込、据物、地透物、あらさるなし其田毎の月の作最有名なり全圖下に出す
縁の圖には東家、蘆雁、蓬舟、千網、蛇籠、初月、梅、櫻、(吹寄、網川、等)松、糸巻、蛛絲、又中心、(古名刀の銘を摹したるもの西垣名代の一なり)等枚擧に遑あらす
蟹、人物、(多くは据物)龍、投、桐、の如きは重に精作におゐて見る枯木はまゝ鍔にあるも縁頭にはいまた見す又枯木は布目にて入り枝幹とも針なし作中拙なる如し

家藏中投桐兩三品あり中に眞に絶品と稱すべき精作あり特に圖を掲く左の如し

厚燒金布目殆据物ノ如シ　○ハ脫ヲホス



西垣普通精作ト稱スルモノニモ象眼上ノ毛ホリ一重ニテ(葉ノミ二重毛ホリハアリ)葉ノ横シベ大抵二段ニ止リ三段ナルハ未タ見ス其花心ニ至テ二重ニ入ル如キハ最稀ナルヘシ此作比類ナキ精工トナス所以ナリ

又家藏中左の在銘縁あり亦絶てなくして獨これあるものとなす



鐵生ノマヽ、
但天上ハ銅ナリ

此圖ハ松ニ帆舟ナリ
松眞鍮帆銅共ニ据物

此作に彫上ものにも亦名代の作あり一種の浪にて俗に草の浪といふ他家に絶てなし又此作にも甚稀なり左の如し

肉置最高ク且丸キ方　地四分一



此彫アル線ハ多クハトヒ式タリ

此外最有名なる引舟の圖の縁ありこいふ其圖柄は人物舟等金銀赤銅四分一種々のいろゐなりこ極念入の作なるべし

縁頭鐺其他小道具の諸式を擧くへし頭にはナツメ形縁は太皷形は通例こす戸樋形及壺形等は專ら赤銅四分一を以造り象眼は大抵ケシ込にして美なり若壺形に彫上又は据物又は鐵を以造りたる作あれは必す精作ならん(銅及眞鍮地にもケシ込ホリ上共にあれこも其縁の式は太皷形の外いまた見す又其頭の式中袴腰縁の式中蟻腰は西垣代々見す諸式凡左の如し

通例ナツメ形



同　稍角肉ノ方



同



同



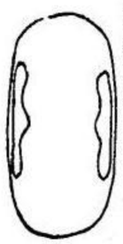
深丸形　糸穴洲濱式モアリ



同



猫脊形



同

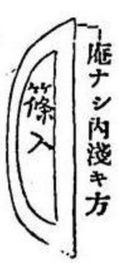


此式一定ノ名稱ナシ

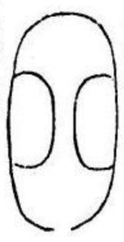


此式ハ四分一又ハ眞鍮ノ外見ス又ホリハ浪ノホリ上ニ限ル如シ

同　庵ナシ内淺キ方



鼻操形



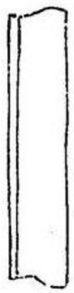
肉置丸ク稍尖ル方



通例太皷形縁　玉縁ナシ



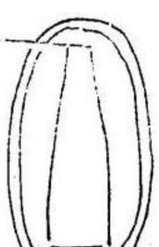
壺口形　玉縁ホリ上也金ハミス



戸樋形　肉置自然ニ成ルモアリ



通例縁



ワカシツキ但白銀モノニハ蝦吹ナルヘハ勿論ナリ且縁金ト天上金ト平ニナル

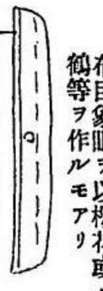
天上金ヲ縁ニラ受ク但蝦着ニアラスシメ付ケタルナリ

泥摺鐺　最淺キ式



布目象眼ヲ以櫻花或ハ鶴等ヲ作ルモアリ

淺キ式ニハ庵少ナシ



泥摺式　稍深キ式更ニ深キモアリ

栗形

「ホリ上ケモノヽ中裏ヨリ打出シノ如ク見ユルモアリ又稀ニハ据物モアルトソ

白銀モノニマヽ見ル但多クハ浪ノホリアリ

袋篇式

象眼金張金ヲ以入ル

鉄形式　薄ク尖ル方

緑銀布目

半鉄形

緑象眼銀ホリ込ミ二代目ノ作ナラン

三具金具　鉄六所揃物

雲彫上金銀布目

玉縁金布目

初代作　赤銅ミカキ地　舟金据物カヒ銅ホリ込蔵金ケシ込岸ホリ上

ウラ無地但ミカキ

（此對作馬針柄アリ今散失ミ（スト云）

二代目作　鐵　蒲鉾形薄作ノ方　盤四分一据物水毛ホリ草金ホリ込

ウラ無地

初代　鐵　角肉厚作ノ方　雲毛ホリ銀布目

ウラ無地

二代　鐵　肉置蒲鉾薄キ方　月異鎗据物

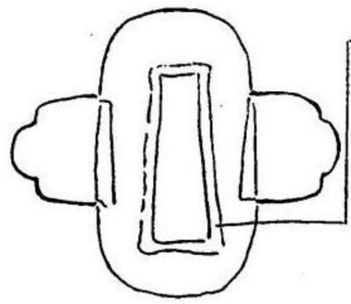
キサミ

ウラ無地

二代目作には後藤傳三ッ所揃ものもありこ現に其家筋に程乗形巴三所もの雛形存すこいふ

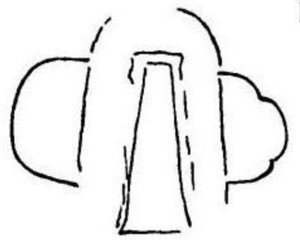
鍔の櫃並に切羽台の式通例左圖の如し

初代

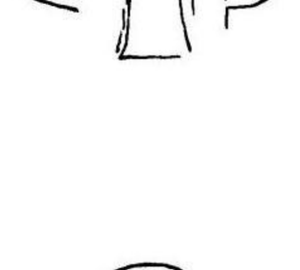


タカネ穴際少シクスクモアリ

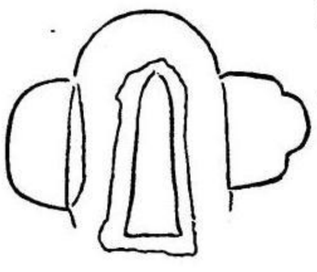
同



同



同



同



以下片櫃ヲ寫スモノ

同



同



同

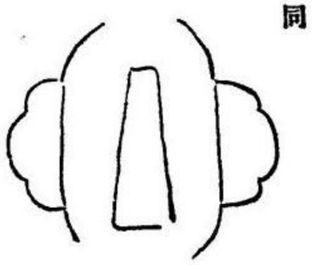


同

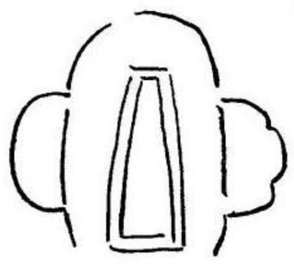


肩透ノ台二代以下ニモ此式アリ

同

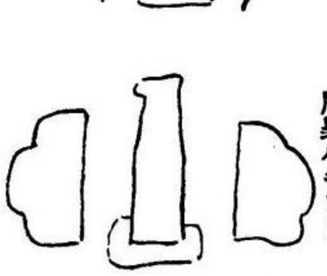


同



二代目

巴ノ櫃但シ異体尚一層異ルモアリ

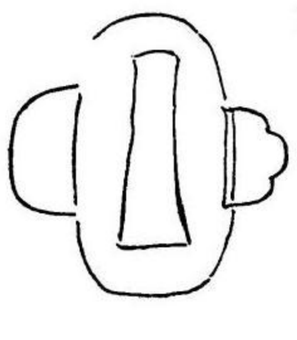


同



西垣永久七十歳作之

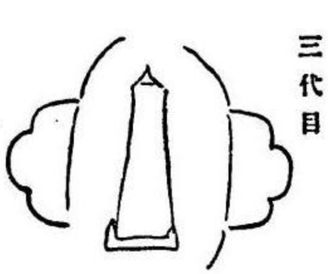
同



拗平



三代目



概ね斯の如しといへども二代の初代に三代の二代に似たるはあり二代以下は概して美なるかたなれど趣乏し末は先代に依るのみ

在銘は初代には絶て見す西垣勘四郎作又肥州住勘四郎作と切るは皆二代なるべし勘平は在銘多し西垣勘平作又は勘平作と切る晩年には年齢を切りたるも見ゆ三代目は在銘まれなり某氏藏に前名を即西垣仁藏作と切たるものあり珍らし

慶長十八年生元祿六年死行年八十一

二代目勘四郎吉當又永久前名茂作

父の職を繼ぎ諸作多し後に後藤顯乘の門に入り傳書を得る鍔及縁頭等總上手にて二代たるに愧ぢず作行を概評すれば美なる方にて初代より密なり其唐草象眼殊に勝れて見事なり(春日初代に髣髴たる二重唐草あるは此作とす)透物据物象眼もの種々あれど初代の雅味なし布目ものは三代とは分けかだくあれど初代とは判然たり其吹寄櫻の如き花稍大にて心の毛彫に見所あり

寛永十六年生享祿二年死行年七十九歳

二男勘平別居

此作行概して堅く見え品格隨て下る其透鍔の如きも肉置圭角ありて毛ホりものもとかく荒々しく覺ふ、又兄の如き妙なし但し枯木象眼はよく初代に似たり

諸作二代に次くへし但縁頭等の作は分ちかたし

生死年月詳ならす

三代目勘四郎吉敎前名仁藏

此作初代及二代の如く多く見ることなし其作名は二代に繼くものかしら次第下りなり一般の作行は美なるかたなり

八代三代目甚吾は此門に入るといふ當時に於て重せらる亦知るへし

延寶八年生享保十三年死行年四十九

四代目勘四郎吉敬實は野田某二男
此作いまた見すといへども更に下るへし後故あり浪人となるといふ
享保八年生安永九年死年五十八歳
五代目勘左衛門正久
江戸金工熊谷義久の門に入る(熊谷作に肥後式多きはこの故なり)
後次細工人となり三人扶持給ふ
明和七年生文政二年死行年五十
六代目四郎作良久後義久
職祿前に同し
江戸熊谷の門に入る
寛政三年生嘉永三年死六十歳
七代目勘左衛門義正實は池田某二男
職祿前に同し

文政三年生明治十二年死年五十九
八代目即當代四郎作實は六代目長男
初代より連綿八代の間に於て代々作あらさるなし盛なりと謂ふへし
然に二代目已に後藤傳を兼ね又五代六代相繼て江戸作者の門に遊ふ
こゝにおゐて家傳三變するものゝ如し其勘平の作たとへ品格至らさ
るも却て其自家正脈を維持するものと云ふも可ならんか

○志水家

初代仁兵衛一幸實は平田彦三郎
細川三齋公入國の際平田彦三と同しく隨行八代に住す彦三亡後實子
少三郎は藩命に依り熊本に移り聟養子三郎兵衛なるもの判屋職となり仁兵衛白銀細工の養子相續し五人扶持給ふ
明智日向守家老志水丹左衛門に由緒あるを以て志水と改む
生年月詳ならす延寶三年五月死

二代目甚五郎永久（久は次の誤りならんか或は後久を次に改名し其記入脱落せしにや）
十五歳の時重扇の鐔を作り藩公に献す（三代目も例に依る）
家督の節三人扶持給ふ
元和六年生寶永七年正月死行年九十一歳
三代目甚五郎永義
貳人扶持給ふ
三代目西垣勘四郎の門に入る
以上の記は四代目甚五より其筋へ差出したる先祖付の寫に依る
元祿四年生安永六年死年八十七歳
四代目甚五實名詳ならす
扶持前に同し
延寶三年生文政六年死年七十八歳
五代目茂永以下俗稱詳ならす代々甚五と稱せしや
六代目永典
七代目永泰
八代目卽當代永利
以上志水の歷代たり然に肥後金工中甚五に至て時代其他に疑の容るへきもの頗多し第一系圖書粗略にして殆考へかたきもの少なしとせす今左に試みいふへし
初代は前の如く仁兵衛なり甚五の稱見へす又元來平田彦三甥にて其亡後細工養子の相續をなすことあれとも此事平田の系圖かきに見へすのみならす少三郎は彦三嫡子にて其相續人たる事は該系圖に明らかなり（少三郎作もあり）されは仁兵衛よしや一旦養子名義あるも出て志水を名乘（分家にもせよ）たる譯にて平田相續人といひかたきに似たり
又八代初代は仁兵衛と稱す然に其實名の一幸と共に曾て在銘を見さるのみならす聞しもなし二代三代は共に甚五郎と稱すこれも世に有

名なる在銘ものはいつれも甚五にて郎はなしそは郎を略せしものにや疑ふへし

初代已に甚五にあらす仁兵衛なるときは初代甚五と稱すへからす然とも現に八代甚五と切りたる作に永次在銘のものに比して作行時代ともに上るへきものある如し且久しく傳へいふ永次は二代目なりと(先祖付中永久と名乗甚五郎の代を指す)然は仁兵衛亦或は初甚五郎と稱し其記入漏にや

三代目は三代目甚吾と銘す(八代にて代を切るは此外見す)又甚五の五を必す吾に作り郎はなし(一説に三代は其正統の子にあらす當時の名工を以て八代松井氏(細川侯一族の撰拔に依り三代目の銘を許可せしといふ)

甚五郎の郎を略せしは前説に假定するも三代は二代と異り吾の字に切り稱呼こそ同しきも全く異字なり古きは字体に頓着せすとの説も

あれと工人の銘振は彼輩に取り大切の事たり其常に異字を用ゆるは受けかたし作者若し文盲なるときは猶更守るへき筈ならん

愈初代の名は仁兵衛なるときは從前八代仁兵衛とか志水一幸とか又は八代初代とか呼ふへき筈なりそれを久しく初代甚五と呼ひ來りしはとにかく誤りに歸すとせは今迄初代甚五と呼ふ作を繰り上け仁兵衛作と改ためて呼ひ而して從前同作となす作(實際在銘にて二代より上る如き作)を一代繰り下けさるを得さる結果とならん

甚五代々かくの如く疑ふへきもの多しといへとも今不完全なから鑑定上便利をも計り仁兵衛を單に八代初代と呼ひ實永に死せし甚五郎を二代目と安永甚五郎を三代目との如く文政以下順序に說くへし

初代作行總て古雅なり鍔の式は多くはアチリ形、木瓜、等にて環耳スキ下ケに作るものもあり概ね厚造のかたなり且肌物勝ちなれは一見甚美とはいひかたきも却趣あり

据物布目象眼共に著名にして其天龍、鯉、等は据物ホリ共にあり人物、蟹、
其外動物類は専ら据物に作る例なり牛は彫上にて名代たり雁、糸巻、菊、
は重に眞鍮張金なり布目は金銀いつれもあり就中布目銀すりはき象
眼は妙とす
又地鐵に燒手クサヲシと唱ふ法あり最得意の如し案するに其師彦三
傳來ならん但彦三に比して深く入るかた故に一層強く見ゆ時雨の彫
亦著名なり亦平田法より變化せしものか疎なる所尤妙縁頭にも据物
象眼共にあり龍、雲、蟹の類又稀には桐紋等もあり龍は凡三種あり鍔に
は諸種あれど縁頭には布目にて入り痩長きかたなりタカヂハ毛彫と
す蟹、桐、等西垣作行と別にて一見或は拙の如き所即雅致の所か
又眞鍮張金を以唐草菊等も作る其金ホリ込は稀作たり
二代目鍔の作は工あり殊に勝れたるは古意あり初代に迫るへしとい
へども概してタカネ槌目共初代より稍小き方にてかつ美なり此所實
は初代に遠く及はす(鍔式多く薄作なり)然共白銀ものには驚くへき精
工あり或家の藏赤銅鍔金纏目覆輪取に作り全面精細なる毛彫を以唐
草を造る非常の作たり一見或は埋忠作かと疑ふ計なり又銅四分一等
にも精密なる彫込象眼なきにあらす(過半唐草)据物中龍、蟹、等は大に初
代に近きもあれど牛はタカネ稍過る如し卽工に過きると評すへきか
ゑかし八代甚五の作と稱すは大かた此作に係る如く初代は勿論三
代目の作も此作ほど多く見へずその縁頭及小道具の作は殊にしか
り
三代目の作は地鐵初代二代よりはうるはしくやき手くさらしの類は
稀ならん中にミカキ地にして春日の如き美觀もあり
鍔の式略二代に依る初代よりは大に薄し二代よりは稍厚きかたなり
然共其牛、菊、透物等の作は所謂家の掟ものにて代々左迄差なかるへし
といへど其差實は重に此等の作に見る

三代目の据物はいまた見す蓋稀なるへし布目はもとより見るも先代より遙に下り弱く見ゆ西垣の門に入るとあれは八代名物の布目も此代にて下落せし如し

又此作には常に出來不出來ある如し然に僞物多きを以見れはさにかく一代の名人とはやされしは疑なし(僞作は瓢巴、スキ下菊、の類なり)四代目も次て上手との聞へはあれどいかゝにや慥成作とてはいまた見す其五代以下には作といふ程のものなきとそ

更に袖ひいふへし八代鐔にも透ありしかし最少なし(整工譜略なとには透多く梅木桐其外にもあり)

八橋或はタスキ透の類に過きさるへし又譜略に甚五は何頃なるや當八代になるとあり八代とは地名のやつしろなりそれを家の代とこゝろへかく記載したるもおかし)

眞鍮張金象眼銀布目象眼共特に八代の名代ものたりゆゑに僞物にも多くはこれを寫す又張金は他家には金銀共にあれど八代には銀も稀

況や金はなし獨家藏梅花鍔に見るのみ矢張眞鍮の法の如く入る眞に絶類なりと神吉樂壽も常に賞せり圖下に出す

縁頭は初代以下甚獲かたし其式は頭は重に大丸、袴腰、縁等は太皷たり丸形は西垣に比すれば肉強くかつ大にして深きかたなり袴腰は春日式より稍角肉にして高く武張る太皷は却て他家より概して深くある

は常なれど却又厚からず(一種天上金を受く所極めて厚作のもの見ゆ)

又白銀ものもあり其精密ある作には金小縁ある作も見ゆ多くは二代目以下の作なるへし

切羽臺幷櫃(初代には無櫃ものの見ゆ)概ね代々同じ但代下るに隨ひ肉置におゐて著しく劣る

小柄笄馬針の如きは絶へて見ず鎚も至て稀なり家藏中長鎚及笄類似の一具あり共に二代作なるべし他具と共に下に圖を挿む

傳へ即細川家舊制中小性は金瘡醫を兼ぬこそ果して然は其笄に類似の一具は即膏藥へラに造りしものにや猶考ふべし

丸形 深キ方



同 稍淺キモアリ且淺キハ稍尖ルコトロ



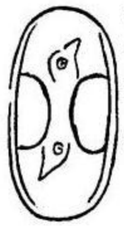
袴腰形 角肉ノ方



同 丸肉モアリ



猫脊形 銅



同 ホリ上低シ



異体浪形 正鐵



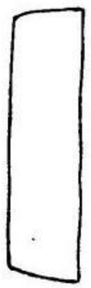
同 肉盛最強シ



太皷形 淺キ式



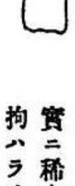
同 深キ式



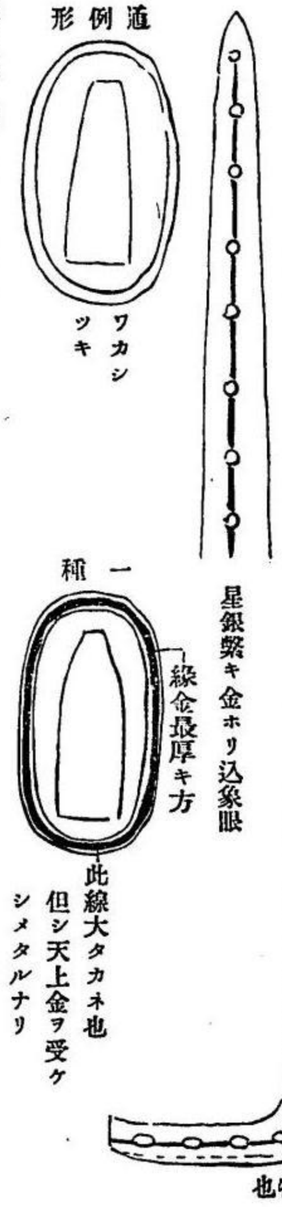
樋形 眞鍮張金象眼但掟物 此式最稀也



戸樋形但自然 最厚キ方



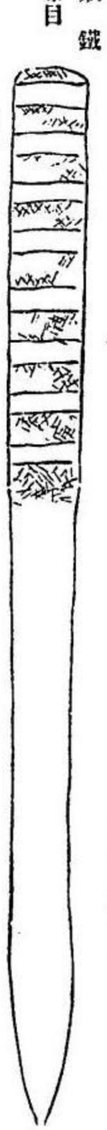
因ニ云中心線ハ西垣勘四郎ノ得意タリ春日其他絶テ無シ此作實ニ稀ナルモノトス其勘四郎ハ銘鑑ヲ摸シ往々眞ニ迫ル此ハ拘ハラサル如キ所却妙ナリ



通例形

一種

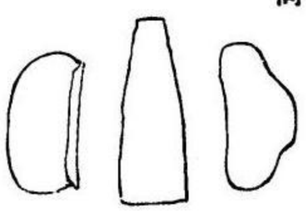
笄ノ類 鐵銀布目象眼ナキ所地ニテ間トナル



初代 眞鍮ホリ込

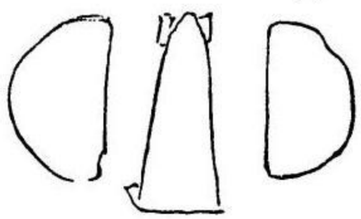


同

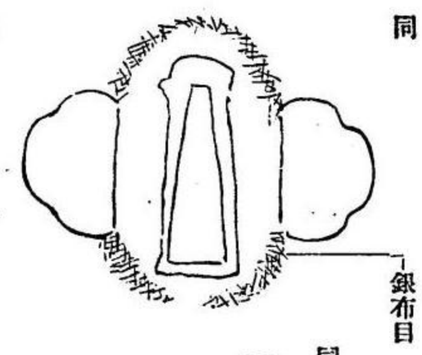


ウラ無地

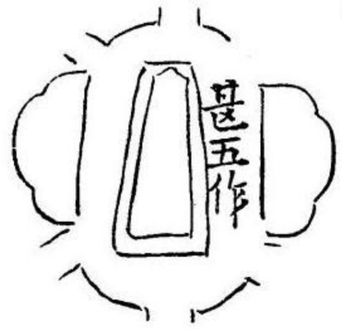
同



同



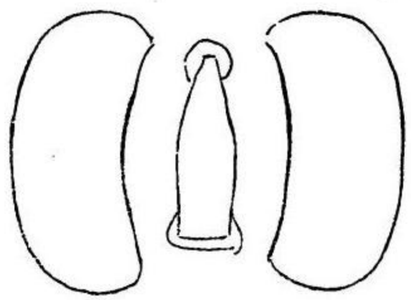
同



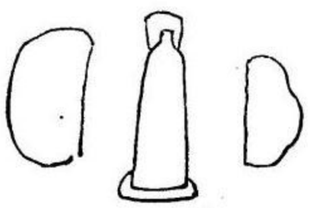
同



同



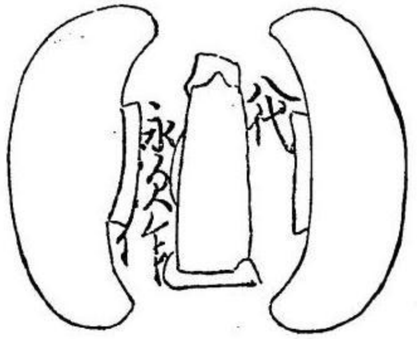
同



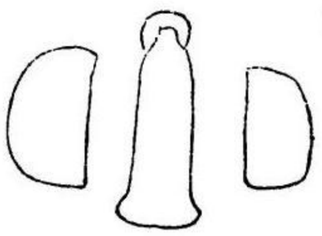
同



同



同



三代目





年齢ヲ切タルハ此外見ス

二代三代とも在銘もの多し二代目は左に八代右に甚五作と切るは通例の如し或は八代と左に永次と右に切る又甚の字に凡四種あり即甚甚甚甚等なり又五の字五に造るは常にして稀には五と三畫に略すもあり三代目の五は吾に造るとは最前説きしが代と名と左右に分ち切り八代とは通例切るところなし右に出したる圖は殊に念入の作即異例を示すのみ又三代目の銘振吾の字に見所あり吾の口の畫第一と第二及第三稍離る如し

別に八代紀永と銘する鍔あり此作名曾見聞せしとなし勿論志水家譜中に見へずといへども作行を以推せば二代目に近し或は紀は志水の本姓にしてそれと永次の永とを取りかく切りしにや(圖下の圖部に出す)

○神吉家

初代甚左衞門

細川忠利公のとき次細工人となる

此作見す其家筋にも傳へずとそ

二代以下數代間總て詳ならず

壽平正忠

此代を神吉の祖父と呼ぶ蓋樂壽より溯のぼり稱すなり

藩公の命を以鐔師の祖林家(春日)一式相傳すといふ

作行總て春日に法とり藤八作に髣髴たり其實大に下るべし

地鐵も春日傳ゆる第一ともまりよく只惜むらくは鐵色稍赤味を帶ひて品格至らず

鍔の切羽臺等作り掛亦春日に似たり但肉置に至て稍ボツタリとするこゝろあり其中心穴の刻印春日三代に似て非なり

專ら透物を作り又象眼ものもあり其カツヲ菱の如きは見事なり但し其法春日より得るも稍大形なり枯木象眼は品格最劣る如し諸作上々に至らすといへども當時正統の作人たるを以隨而其名著るといふ

明和三年生文政三年死行年五十五

壽平深信

此代を神吉の父と呼理由前代に同じ

作行總て父に似たりしかし力及ばず鐔重に透しを作り在銘もの多し

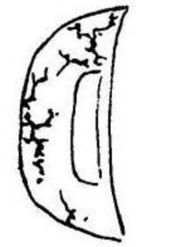
肉置象眼ともに總家法株守に過ぎず他の奇なし略す

寛政十年生嘉永四年死年五十六

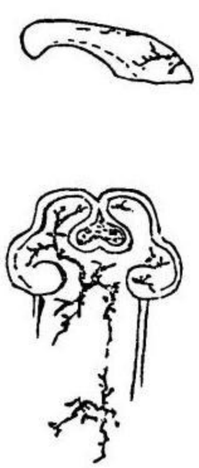
甚左衛門正康前名喜平次樂壽と號す
父祖の跡を襲ぎ次細工人となる
此作地鐵極めて精且美にして毎作形狀より象眼法及透鐵鑞槌等一ど
して精妙ならざるなく誠に最上の作たり其父祖は勿論肥後古今作中
林又七を除く外皆三舍を避くべし
鍔緣頭鎚小柄馬針等皆あり其象眼又は彫種々ある中に就き最著明な
るは二重唐草幷枯木及諸透際に入れたる極細の金緣等也嘗舊藩老某
氏のために造りたる金具一式あり地鐵なり金象眼を以桐紋及二重唐
草を造る其法全面殆餘す所なし此作の如きは眞に又七に迫るものゝ
如し(此の具は近頃宮內省江內獻になる由)家藏にも鐵金具あり右の精
作の如くならざるも亦逸品とす彼の有名なる枯木彫込象眼たり嘗樂
壽見て余に告け云ふ此は壯年の時の作に係れりと抑枯木象眼は唐艸
に比して却雅致あるかたゆゑに往々高尙家の好みに入る又此象眼は
肥後金工皆作る然れども其絕品と稱すべきは前に又七あり後に樂壽
あるのみ(又七の枯木は凡三種あり長短と一種珊瑚の枝振のこゝきと
なり樂壽は只二種にて長短とす枝幹も又七とは自つから異なる處あ
り)
又枯木に彫込と布目と二法あり但し又七樂壽を除きて多かた布目に
て入る例とす若彫込のものあれは概して拙劣取るに足らす元來樂壽
の作ハタカネ底弘に入りてありゆゑに第一金色の光輝あるは云ふ迄
なく強くして容易に拔ける害なし其金と手間とを惜まさる作なれは
品能く價あるは勿論たり他家の作は此點に於て最及ひかたし誠に工
作は徒に形狀の如何のみならす其用意の關係大と云ふへし樂壽の勝
れたる所以亦此に在る如し
此作鍔及緣頭等の地鐵に一種のハダものを見る其狀雲の如く又或は
蕊の府の如く或は芋根の如し蓋し此法矢張又七より化來のものなら

ん妙趣他人の夢たも見る能はさる所こす然れこも僞作は重に此法を
摯すもおかし盖益其僞作の及はさるを見るへし
鐵色着法亦春日傳に依り猶多年の研究を加へ光澤餘りあり抑色着の
事は作者の重んする點にして其出來不出來は數百年後にも關係すへ
しこいふたこへは同肥後作者同色着法を以てするもまゝ別人の作に
出る如き感ありて往々鑒定家の異議を生せしむるここありこ樂壽は
常に此に注意を加へ毎作例に必す數十日間を色着に費やしたるこそ
然るに其法大に秘し當代にも傳へすして沒す此に於て春日傳來名代
の該法全く絶ゆ惜むへし〳〵
余曩に熊本に在り餘暇を以て金工鑒定上の初歩を樂壽に受く今此編
の企は實に樂壽の賜なり樂壽口を開けは又七〳〵こ云ふ其作行を說
く深切にして人をして金工門弟の如き感あらしめたり又謙遜にして
先輩諸家の作を見毎に力及はすこ歎す實は樂壽の力或は諸家の右に
在るも左たらざるべし窃に謂諸家の如き樂壽こ年を同じくせさるは
幸にして樂壽の不幸ならん余は樂壽を稱して又七後一人こなす決し
て過稱にあらずこ信ぜり
或時作行精粗の論あり樂壽云春日代々人の賞する所なり然共眞に精
工たるは又七一人のみ今試に其摹造をなさんにたこへば紋透にして
又七には凡一ヶ年を要すべし其二代三代共に一ヶ月にして足れり云
々樂壽出て初て又七の精の精たるを彰はすもの樂壽前身是又七か
熊本坪井には細工人多し(所謂坪井細工)大かた樂壽前後の出なり樂壽
作桐、唐草、枯木、の類僞作多く出づ其出來よきは眞こなし通ふるもあり
こぞ或人鐵金具(二重唐草)を余に示す且誇り云神吉の精作なりこしか
し余は幸にあさむかれさりき後樂壽に告げしに樂壽大に笑ひいふ樣
それ二重唐草は最鄙重の作たり一生涯多作すべき限りにあらず恐ら
く春日初代こいへごも然らん余の如きは僅に二三作あるのみこ盖其

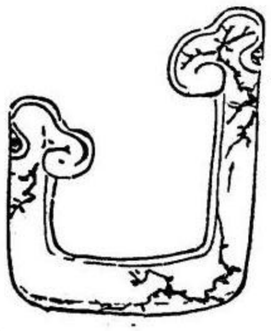
難想ふべし(此時樂壽金工を廢しおれは生涯云々の言ある所以なり)
緣頭の式丸形、深丸、鼻クリ、太皷、樋、壺口、形鐺は泥摺、芝引、袋、諸式皆あり概ね春日の式により或は變化し來るもあり
今藏品中に就き其非常の作に係るものをあぐれば左の如し
銕七所揃但シ裏瓦略シテ圖セス又此鐔ハ春日式薇手透象眼同一タリ亦略ス


燒金ホリ込象眼


此肉スキ下ケ金砂子象眼

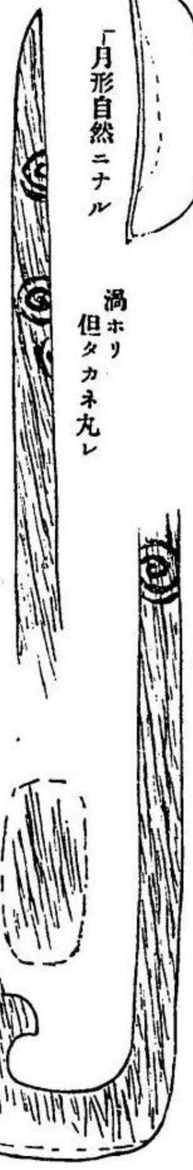

砂子 玉緣ホリ肉アリ但シ無地




天上緣金ハ平

泥摺形(御家刀用)


「月形自然ニナル


渦ホリ但タカネ丸レ

長鎗鎌形 眞鎗

馬針は殊に勝れて見ゆ第一諸家にくらべて形よく勢亦あり(嘗自から改良を加へたるならん定其說もあるべきに聞洩らせしは遺憾なり)然に正作は甚乏しく世間神吉〳〵とはやすもの大抵皆坪井出來なり正作の一本及其式を示す左の如し

平肉形 牡丹金ホリ上厚布目据物ノ如シ唐草金張金

ウラ

ウラ無地

蒲鉾形

「龜ホリ上金或ハ雲又ハ渦ノ類布目象眼唐草又ハ雲等毛ホリ

ウラ無地或ハ銀布目スリハキ又雲毛ホリ表ノ如ク入ルモノアリ

初の式は殊に稀にて後の式は通例たり但し僞作は後の式に多し僞作は第一針先鍛鈍ふく正眞は極めて鋭なりこれも見所の一なりこす鍔櫃の式并切羽臺は大かた春日式に依るこれを略す又金工鑒定も肥後第一こ稱す又其刀劍拵方に至ては殊に深く奥儀に達し從前は藩公の指領初一家中高尚ある造りには大抵其指圖を受け又刀劍も甚好み自から鑑識尋常に超ゆとぞ

樂壽姓質極て溫厚品行固り方正色白く身高し齡古稀に近くして五十前後の人を見る如し平生神佛を信仰し嘗祈願ありて若干年間肉食を禁ぜり然共敢てこれを人に告けず又人家たま〳〵之を供せば辭せずして食ふ蓋其厚意を空しくするを恐るゆえなり而して心に誓ふ所あり則一食に對するに幾日間の禁限を延べ以て償ふこれがため一生禁を解く能はずこ其謹嚴かくの如し人皆服すこいふ

文政十四年生明治十七年八月三十日死行年六十八

當代忠八實は深信二男

此作透鍔は略實父の意ありこいへこも總て作劣る子某作なしこ云ふ

○遠山又七

遠山鍔こ稱するもの賴家賴次の兩銘あり父子か兄弟か詳ならす賴家在銘の作行地錆ゑまり甚堅く見ゆもの多し蓋し一種の作にて多くはヤスリ地又山吉鍔の小透しに似たるもあり耳は常に薄作りにて打返し多しまゝ透鍔も見ゆれこ疎にして遠見の松の類に過きさるへし

賴次亦堅作りの方なりゑかし此作には象眼及据物を見る

遠山又七の名久しく著はるこいへこも賴家賴次共に鐔の外作見へす此作時代分明ならす式云春日初代より下らさるへしこ一說に清正公の抱こも云ふ又地鐵堅き故に其作幾分若く見ゆるもあるへし

○谷傳次

此作名あれど正眞の作存するは稀なりと嘗一鍔を見る銀布目を以銀杏葉を打違に造る一種の作行とす又嘗て同銀布目雲の縁を獲る其式長且大作行前の鍔に畧似たり

右作行に據り概評するときは勘四郎にあらす寧ろ彦三の法に近きか如し或は其門より出るもの品は西垣三代よりも猶下るへし

○三角幸次 正春(こうの字詳かならす假に幸に作る)

此作は最特種なり重に白銀もの以て精密なる彫を作る目貫及縁頭共多し鍔は却て稀なり其鐵ものは余いまた見す

目貫の作は肥後多くの金工中絶てなくして獨此作に多く見ゆ其裏に△の形を付す案するに此印は即三角なるへし

又好て烏銅を用ゆ其魚族を造るもの十中八九に居るこゝし盖し平生得意にありしならん就中その鯰は諸家と大に異り痩長のかた且鰭尾髭等精密に彫る鯉亦同じ

縁頭は銅眞鍮等にて重に彫上又据物なり地は通例石目稀には魚々子地もあり(布目象眼ものは見ず)地は總て厚作りのかたなり肥後諸家と作行別なれば知らざるものは他方の作と疑ふもあるべし一説に性癖あり一生他行をなさず然にいまだ曾見ざるものも能く作り人をして驚かしめたりこそ盖奇人なり

此作亦時代詳ならず一説に三齋公の時八代に住すこいふ其銘に七十と兒ゆるもあれば長壽の如し左に作例を示す

家藏中其老後の作殊に精作なる赤銅鍔あり非常の出來と認むれば全圖を下の圖の部に出す

○萬日坊 春日村萬日山の住僧

鍔の作あり地鐵は略春日に類す或は又七の前作りとも疑ふべきも見る遠見の松又霞透等なり皆厚肉のかた上品にはあらず又小道具類の作は絶て見ず

一說に寺又七の近隣にて常に其工場へ來り時としては戲に造りし事ありとも傳ふ又一說には又七の甥也とにかく僧家の一時戲作なり奇といふべし此外總て詳ならず

○諏訪家

初代 彦之丞 正乘　慶長寬文の間

二代忠左衞門 正次　寬永寶永の間

三代忠左衞門 正道　延寶寬保の間

四代 彌治平 正之　元祿寶曆の間

以上代々作の有無詳ならず

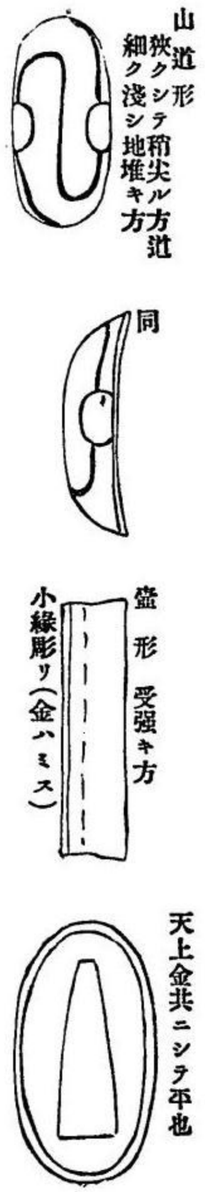
五代目幾平 正足

此作地鐵細やかにして麗はしく一代の上手と稱す緣頭は西垣式より は肉置強きかた也象眼ものは布目にて櫻花又は唐草の類を作るホリ込据物はいまだ見ず其唐草の仕掛は大かた燒青両金共入れ交ぜに用ゐ形狀勘四郎に似たるもあれど其實葉先蔓先におゐて自から異るとかく延び勝手にて且西垣に比せば稍密なるかた也枯木は多くは枝長く垂れ弱く見ゆ鐵太刀金具も稀にありこれも肉多く形亦大なる方象眼は矢張唐草の類也諸作西垣三代と甲乙なかるべし但鍔は稀也通例緣頭の式一具を示す左の如し

享保十七年生享和三年十一月死行年七十九
六代目を國吉といひ七代目を大作といふ各作ありといへど傳へる程のものとては聞かす八代目卽當代に至る

○谷清兵衛

此作行美にして地鐵亦美なり近世の上手とす重に縁頭の類を造り鍔は少なきかたなり
象眼は吹寄櫻、カツヲ繋き、唐草、又まゝ天龍も見ゆホリ上ものもあり其浪等は見事なり唐草の狀幾平より密なるかたにて吹寄櫻は花至て小にして幾平の反對なり龍は痩長きかたカツヲ菱は藤八に似て稍小形又紋散は象眼甚美あり圖下に出す
總て象眼の金色は上其いろゑ分及ホリ込又据物の諸作はいまた見ず鑒定家例に幾平か清兵衛かと同位に稱す(實は時代の差もあり幾平の次に位すべし)左に作例を示す



天保十四年死七十餘歲といふ此他詳ならず

○中根平八郎

二代目も清兵衛と稱し二男四郎兵衛と共に作ありとぞ(世間に在る清兵衛作鋤切羽類甚見事なりもこより初代作もあるべし又二代二男共にもあらんしかし鍔等は其作あるも恐らく彼の坪井の類なるべし

舊藩士にて餘暇の作あり專ら正阿彌寫を作る(御家刀用信長透及唐人笠の類)其銀ホリ込象眼の如きは最工にて中には眞に迫る又泥摺鐺の作は其式好く妙なりたゝ惜むらくは一生摸造を事とし自家の作とてはなし(御家刀用泥摺鐺は其式甚やかましく第一月形肉置等を以作者工拵を判すべし此作研究至れりといふ然ども猶神吉甚左衞門作には及びがたし彼は自然になる如く此は苦辛の處露る其差慨ねかくの如し

肥後刀拵方に高熟にして神吉に亞ぎ名あり近年歿すといふ

○坪井諸工

吉田德治　坂本彌市　坂梨五郎兵衞　宮崎官藏
宮永子之吉　野田仁一郎　桂十作　田邊保平
等は屈指なり

諸工彫象眼各々得意ある如し德治は摸造ものをよくし其甚五寫の如きは最工あり仁一郎は專ら毛彫もの著名なり保平は晩年悟る所ありて大に面目を改め所謂坪井細工の臭氣を脫するに至る此他は一々評しがたし略す

小堀惣五郎亦坪井に住す此作專門は鉋、切羽、シト、メ類にして所謂白銀師かり作行最上に位す又鐔其他小道具の地造亦工あり但し鐵ものは一切作らず

因に云ふ今肥後刀拵をなさんに欠くへからざる工人四名あり鉋師小堀惣五郎鞘師前田巳太八塗師森田謹三郎柄卷師守永熊藏とす各絕技たり

凡肥後古今著名の作者は以上序列する如しといへども外に刀匠に在りては延壽國秀の如き又時の士人の如きも亦鍔緣頭等の作まゝ見ゆ然共甚賞すべき程のものはなし但し國秀は刀匠たけにて鍛鍊法よく或は木目肌等もあれ共概ね堅きかたなり又士人と單にいへばちと空なれどかの宮本武藏の如き門弟筋とか又は時の劍道家の自作かと想

ふものを指す此等の作大かた武張一方にして味ことては少なし
こゝに似て非ざいふべき作あり其時代作行ごもに下らざる縁に在り
(鍔いまだ見ず)凡二種を認むべし一は春日に似一は西垣に類す或は神
吉の祖父より先代の作かざいへど亦信じがたし左れは江戸熊谷源七
等の肥後寫しかど見れば第一時代適合せざるのみならず作行に於て
亦大に疑ふべし京攝間にも從前肥後寫少からず然共そは近代の事に
て古きは聞かずごにかく二種共手際能く西垣二代位より下らざるも
のゝ如し此等の作從前踈漏の鑒定に春日又は西垣作ご一口にいふて
通りしならんか然に余は旅作ご極める外なし今二種圖式左に出し參
考に供す

平肉ノ方
花心甚密ナル方



木ホリ上銀スリハキ枝先金花金銀



ワカシツキ
天上縁金ト平ナリ
即春日式ニ似タリ

トヒ形
月銀ホリ込龜四分一据物艸金ホリ込沽ホリ上





ワカシツキ
綠金天上ヲ受ク即西垣式
ニ似タリ

櫻花は肥後諸家皆ありごいへごも右圖の如き立木に作るものは春日
初諸工絶てなし又月龜共に西垣にある例なれご此草ホリ込に作り且
金色殊に上等なり是西垣になきところごす地鐵も何分異り二種ごも
に稍粗なる如し
又別に人物ご籬及草ごある二縁を見る其作嘗神吉樂壽も見て大に疑
ひ戯て勘四郎か七分又七三分又旅の(旅ごいふ事前にも記せしが「たび」
ごは熊本のいひ習ひにて總て肥後外をいふ肥後物鑒定上必ず入用の
言葉ごす)勘四郎なごゝ云ひてやみたり
抑金工鑒定は末事ながらかたしごいへば可也かたし惟其作行に付二
三の掟を見出し時代亦適合すれば直に決すべし餘りいろ〳〵ご考へ

過すことはひとり決する事能はざるのみおらず終に弊も生ずべし若それ二三の掟を認むればたとひ他作の在銘に在り共鑒定上におゐて却銘をば僞となして可ありしかれども譬は山水家の畵にもまゝ戯は狂畵なきにあらず錦畵かきにもたまには唐畵を寫したるもあらん概して其腕前次第にて他流のものを作ること甚難きものにあらず又實は僞にもせよ僞の顯れざる限りは正眞と同じ價あるは勿論たるべし又確と掟を見とめざるもごこやらそれにていふ事もありごこやらことは元來曖昧の言なれど亦頗味ある如し廣く通ずる言とすれば鑒定上知らざるべからず

掟の事前項已に說きたり所謂掟とは是非共作に伴ふてあるべき事なり研究せざるべからず一口に二重唐草は春日の掟物なごゝいへど勘四郎にも又近くは神吉にもよくあり下りては坪井細工にも多し猶山水圖の文人にも狩野にも又下りて錦畵かきにもある如し掟とは其法

立の謂にして唐艸の一重や二重ごいふに止るべきにはあらず要するに地鐶、耳、切羽台、又穴、タカネ、ヤスリ、槌、据物、象眼、彫、其深淺廣狹布目には細大疎密又其物形の布置及地鐵と關係象眼の金色如何等其作中必ず存すべきもの即掟なり僞作には常に相反す若まゝ似たるあるも所謂至らすゆゑに鑑定家の必要は先諸家の掟を暗記すべき也然共また容易の談にあらす博く覽て他と比較上より入ること一方便か

前人云書畵の鑒定は猶刀劍鑑定の其鯉口三寸離るや忽ち決すへしと同しことは名言也金工は書畵刀劍の如くならす高の知れたる掌上一見足るへきも然共鑑定の理屈は同し事なり久しけれは迷ひ生せんゆゑに初に於て二三の掟を得は云々說きたる所以なり

昔田舍に名所舊跡好きの者あり多年机上に名所圖繪の類を讀み暗記す然るに曾て門を出ることなし老後初て東海道を過き由井ヶ濱を實地に二ヶ所見たりごの奇談あり此事移して鑑定上の戒しめごす抑田

舍人は學はさるにあらす所謂机上の獨學にして實境照査のこゝを欠きたる責こす世間の鑑定書は大抵皆名所圖繪に過きす今この編も亦同しこれのみに依賴するときはかの田舍人たるを免かるへからすに終りに臨み贅記するこゝろかり

肥後金工錄 終

附錄

○細川侯三齋 忠興

公夙に文武の才を負ひ以て戰國の世に處す其功名籍々たるは世遍ねく知る所たりかゝる名將の器量にも拘はらず嘗千利休こ友こし善〳〵茶事風流をも極められ晩年又金工の事迄及び給ふ其作人獲て珍重す趙璧啻ならずこいふ

作柄重に鐵物に在り其地しまりよく亦一種の作たり元來武將餘暇の作なればもこより工人こ幷び評すべき限りにあらずこいへごも概して春日の美觀はなしむしろ彦三或は古正阿彌に近き如し試に之を畵を借り評すれば宛も逸品におけるが如く他の三品外に在るものか世間公の作こて傳へ誇るもの大抵皆僞なり其正眞の作こなすもの余たゞ數品を見るのみ中に就き最敬服すべきものは舊藩老有吉氏の祖先へ公手から玉ふこころの鐔こす實に非凡の作行にして極めて雅趣

あり(圖下に出す)余亦幸に一二の正作を得たり其鐵頭の一具は殊に珍重する所なり依て特に圖を挿む





因ニ云平山道頭ハ元三齋公愛刀歌仙作ノモノタリ(刀劍彙定ノ作其歌仙ト號スル所以ハ略ス)原物ハ四分一ヲ以テ作リホリ平ノ字ヶ樣ナリ而シテホリノ浪ハナシ又其作者詳ナラス後世摸造刀起ルニ依テ時ノ作者コレヲ寫ス原物ニハ平ノ字ノ下樋目ノ如キ傷所アリ依テコレヲモ寫スナリトニカク肥後有名ノ式ノ一トス

或人公の作とて一鐔を示さる(これも唱ふ所は公より拜領ものとゝ其式引兩形にして燒金青金を以すゝきを作る其法布目象眼にて例に正阿彌作に見るものに近く甚信しかたし抑公の作の如きは古正阿彌には或は似たるもあり全く緣なきものにはあらされ共自つから異る依て又譜を借りて試に論すへし公は高士の筆俗畵史の筆にあらすされは興來り意會するときは山水花卉手に信せて成ることゝあり重に水墨法にして着色は稀の方ならんたゝへ間々ありても淺縫に止り即銀か又は銅位に過きす其据物彫上の精密の作は勿論布目象眼にても搆大なる燒青兩金を以いろゐ分けに造る即取も直さす極彩色の如き作は恐らくなき所ならん

形式、及樋目、ヤスリ、彫、象眼、諸法共總て拘はらさる處妙とす中に自つから氣高き處を認む是公の正眞なるへし

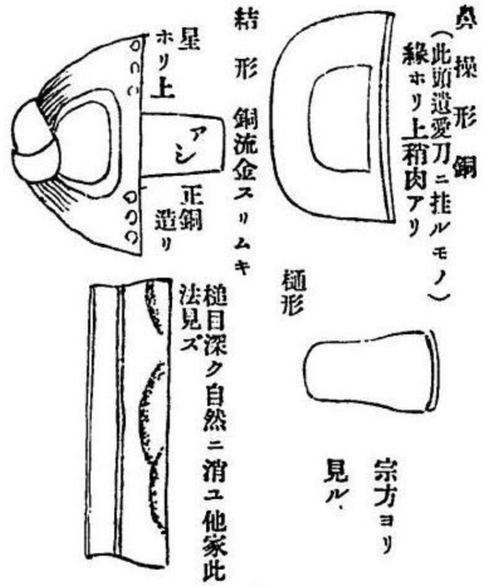
鍔并に緣頭類概ね薄造りたり間々革製鍔又塗緣等に於てごこやら作行雅なるものあり或は當時士人の戲作にかゝるものを後好事者公の作と觸れるもあるへきかとにかく多くある筈なし

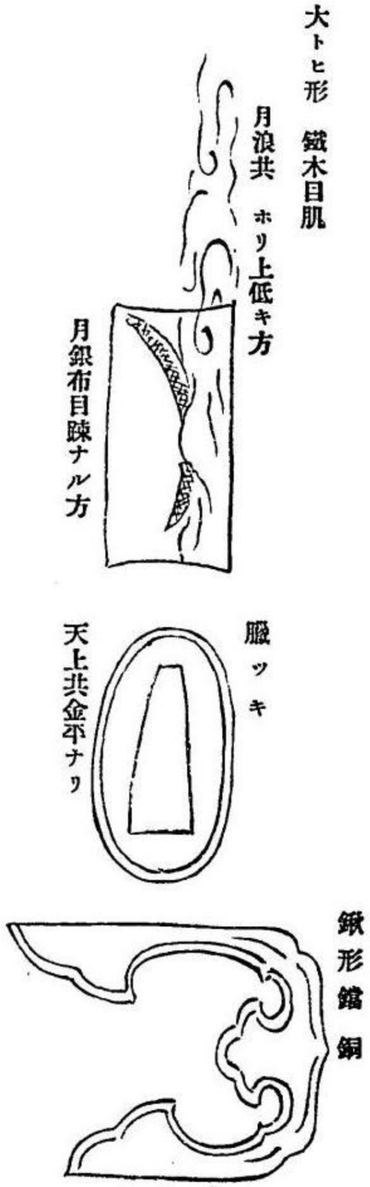
又公は甲冑并に刀劍をも作り玉ひ刀銘を千力包永と切り已に有名な

る一口を見たり相傳ふ公は平生手摧包永を慕ひしゆゑかく銘し玉ふ
こ是恐らく附會ならん聞く所に據れは寛永のころ千力包永こいふあ
り大和手搔の末にて初め土佐國高知金子橋に住し(高知住藤原千力包
永作こ切りたる押形を友人今村長賀の處にて見る)後肥後に移り公の
相槌をなすこ云ふ然るに千力包永は公の事なり公の銘なりこ謂ては
おかし新刀辨疑にも三齋の作こ云ふ何の言そやこ見ゆ余は刀劍の事
は未熟ゆゑ委しくは論しかたしたゝ因に記すのみ
公は利休居士こ刀劍捧の事研究ありこ傳ふ余嘗細川家に乞ひ其大切
なる遺愛刀信長捧其他種々の捧を見るを得たり各捧柄鞘の形より附
屬小道具の取合總て妙ならさるはなし一説に捧は茶儀に取り其栗形
は茶席の爐蛙は(蛙カヒル即サグリ)客裏瓦鐺等は道具又は庭前の樹石
燈籠に擬せしものこそ其高尚云んかたなし眞に敬服の至なり
永祿六年正月十三日生正保三年十二月三日卒行年八十三

○新免武藏 玄信幼名辨助後二天道樂と號す(一説に其宮本と稱せしは母方の姓なりと)
生國播磨赤松回心の末葉なりこいふ寛永十七年の交細川忠利公の召
に應じ肥後に入る十七人扶持現米三百石玉ふ時に年五十七こいふ(其
劍道の事は世著名の談多〳〵此には略す)
此作至て稀にあり錵銅に拘はらず鐔縁頭共に一種の作也地鐵固しま
りて一見刃金の如し故に作行自から堅く見ゆ時代に於けるも若く見
へ勝なり鐔の形は小形にして一種ナマコ透あり(透際厚く内に向て薄
くすく)縁頭も總て尋常こ異り多くは異体にて鼻操形の類又大丸形は
最深く縁は樋及戸樋形いづれも深造りのかたなり世僞物多く正眞は
得がたし元來在肥七八年間にして殊に武門の餘暇の作なれば多くあ
らう筈なし
凡肥後作中最珍こすべきは三齋公及此作なりこす固人を以作を傳へ
るものかの作を以人を傳へるこは同年の論にあらず余嘗在肥中渴望

の餘一を得たりそは銅頭にして浪のほり上げたるもの作行彦三甚五兩家とも異り却て三齋公に近きかと思ふ神吉樂壽に質せしにこれこそ武藏なるべしと歎賞せり又外に鐵緣の一具を得たり浪に沈み月を造る作行亦一種あり武藏にあらざるもとにかく士人の作なるべし其他正物と併せ左に圖を示す



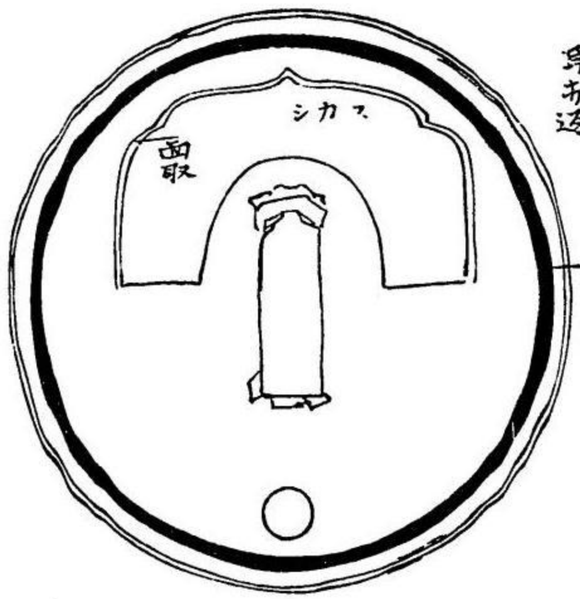


天正十年生正保二年五月十九日死行年六十四一說に六十二歲ともいふ

○清田石見守

三齋公の備頭たり關ヶ原の役に武功ある士なり三千石を領すといふ此作名ありといへど多く傳はらず聞く其家筋に三鐔を藏すと共に木瓜形にして環耳スハマ櫃に造る他二枚は革キセにて其作行は總てかたく見ゆとぞこれも武夫一時の作左もあるべし生死年月等詳ならず大抵三齋公前後なるべきか

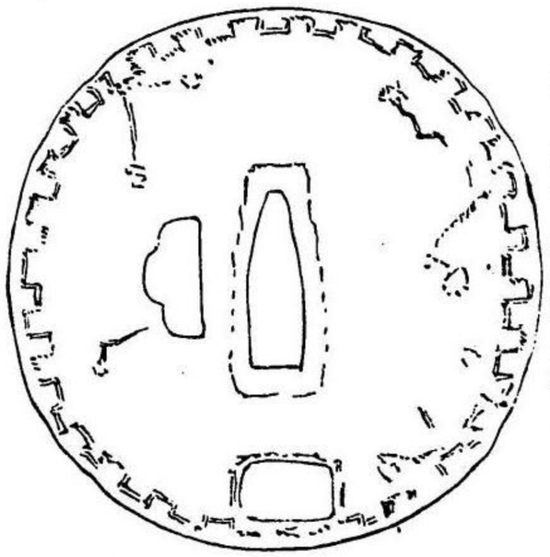
三齊細川侯作



耳方返

青漆象眼

ウラ朱ウルミ漆象眼



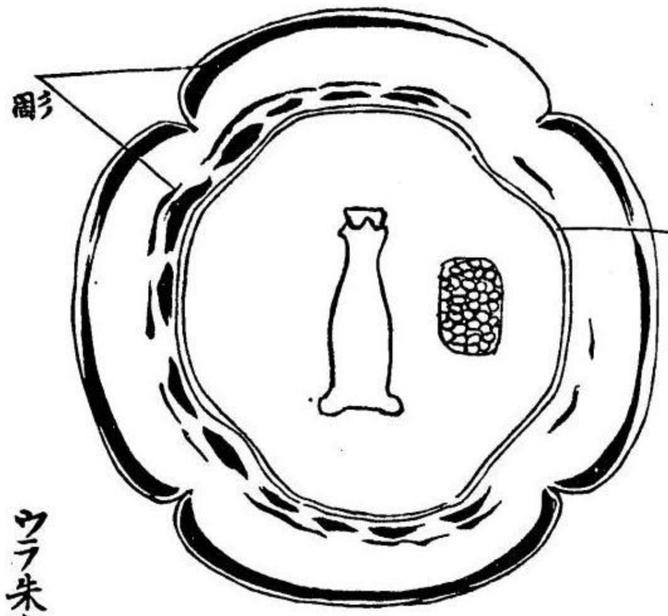
門作

銀象眼但シ縁彫込内布目

ウラ

寸五

刀作類似
土皿形ノ



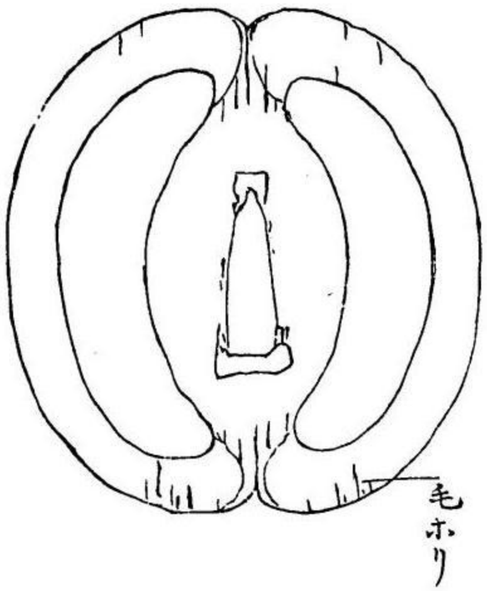
ウラ朱ウヒ漆但シ下地金フセ



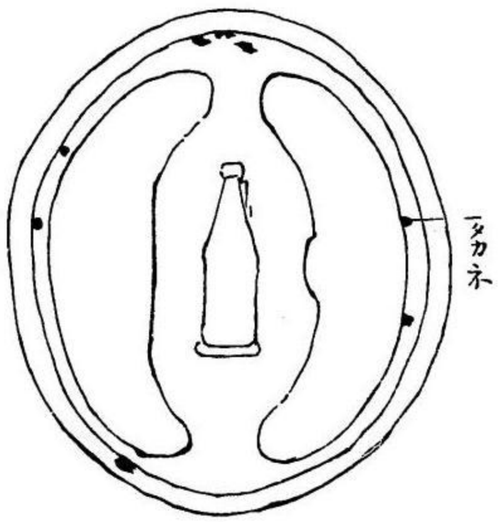
刀側面ヨリミル

新免武蔵作

厚耳透際表裏ヨリスノ



刀作銅



附圖

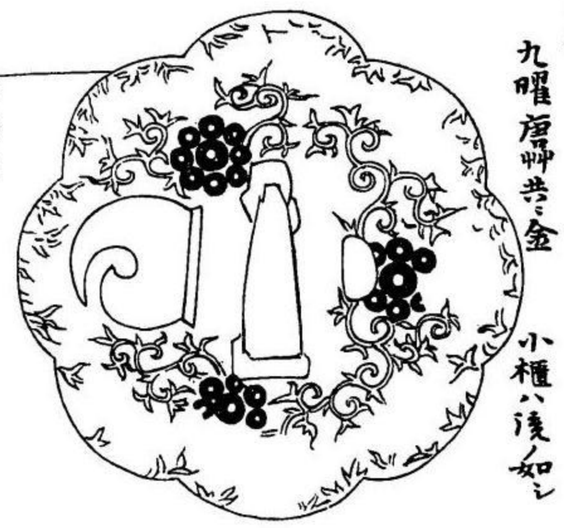
春日初代作　金銘

紋透



門作

九曜唐艸共ニ金



附録終

ウラ扇俯仰二櫻三



鍔作

金象眼但シ地紙ノ處厚キ布目骨ハ彫込ニテ入ル
櫻及虫喰共ニ同シ

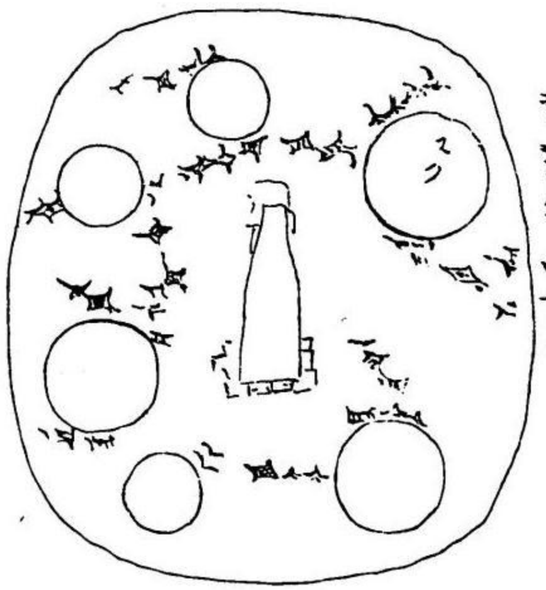
ウラ円



鍔作

萌菱金張金

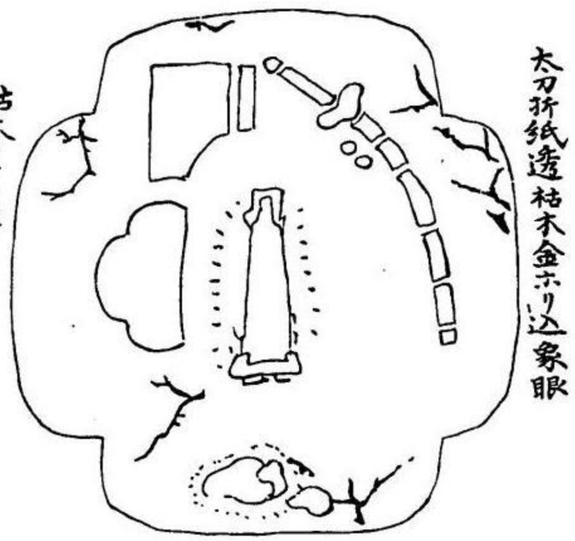
ウラ円



鍔作

萌菱金 吹貫ノ

ウラ円



鍔作 耳角形

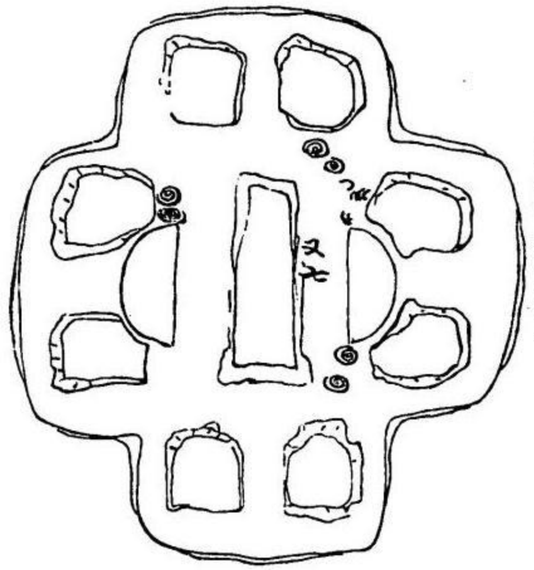
太刀折紙透枯木金ホリ込象眼

枯木耳ニモアリ

ウラ円

金銘

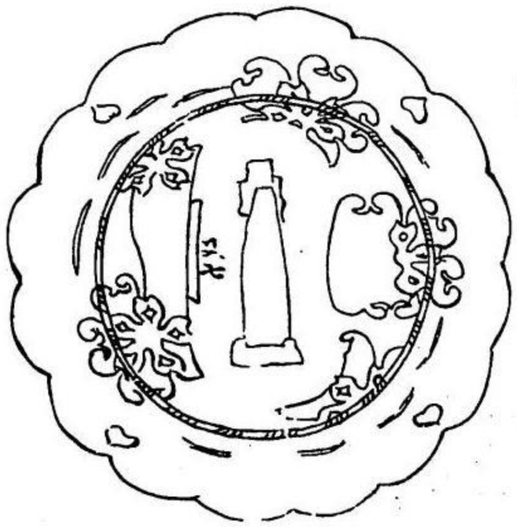
タカネ透 渦金張金



ウラ渦六 内置消平すり

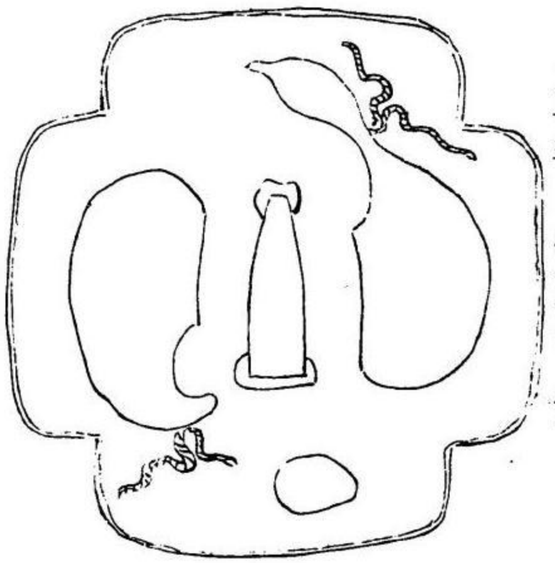
門作

櫻花ノ外面透霞ニシ
縚縄目金



ウラ日

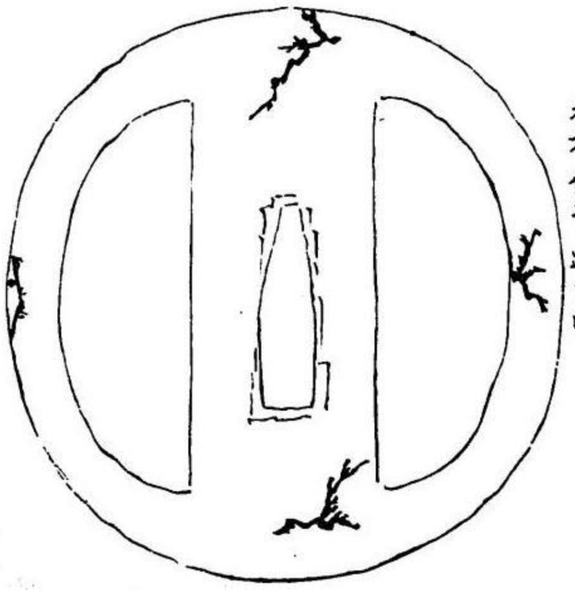
耳古返シ 紐金赤銅ヨリ合セ



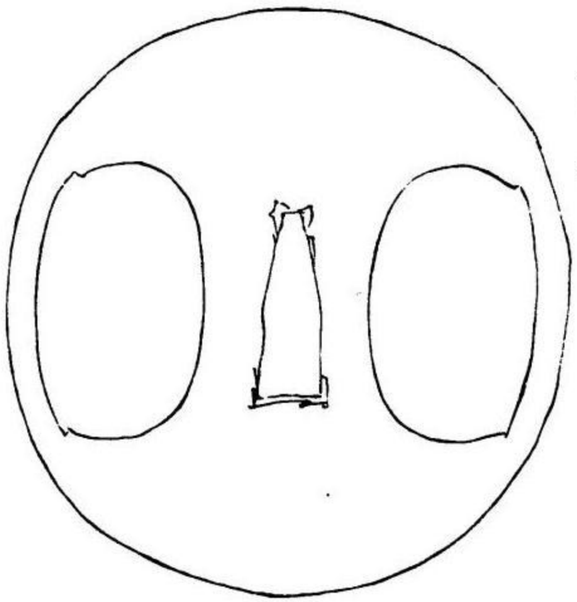
ウラ紐置ク

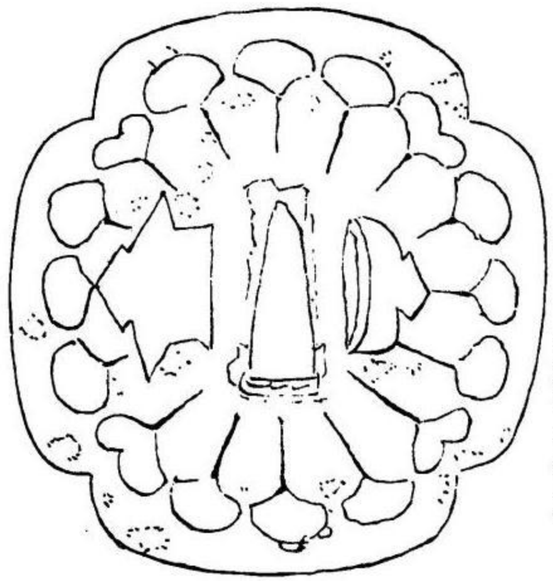
門作

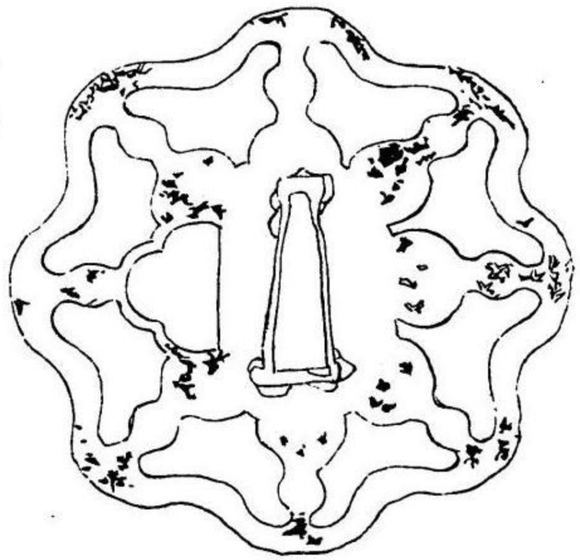
枯木金ホリ込雲眼

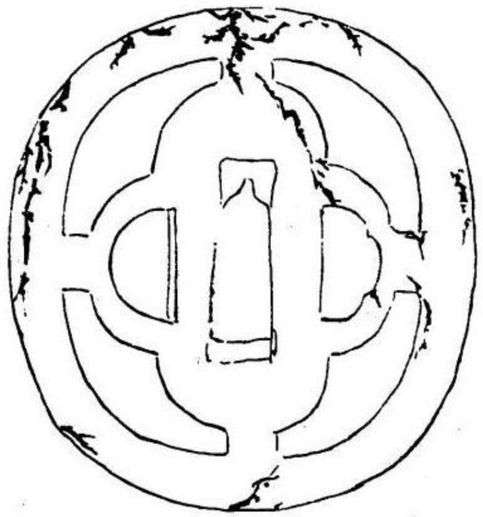


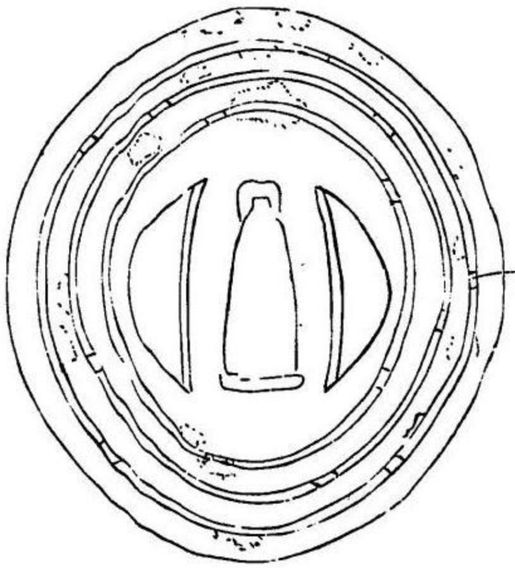
ウラ日





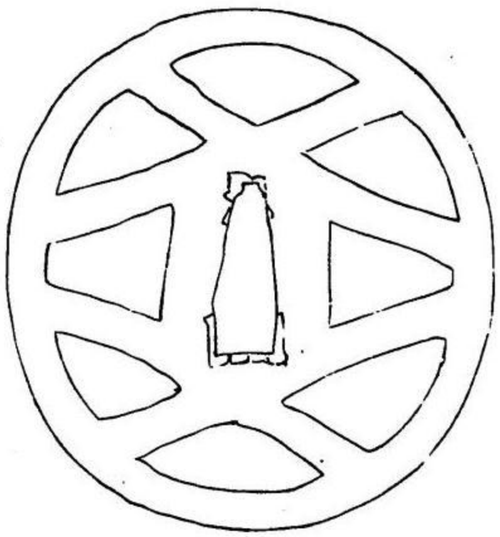




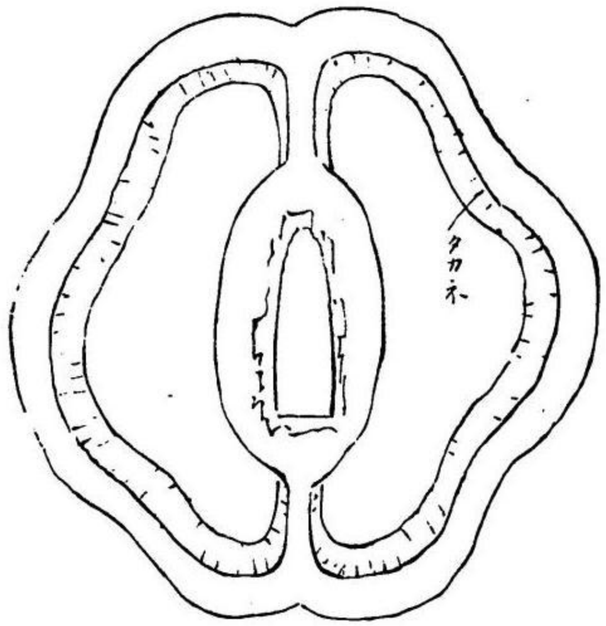


焼手クサラシ

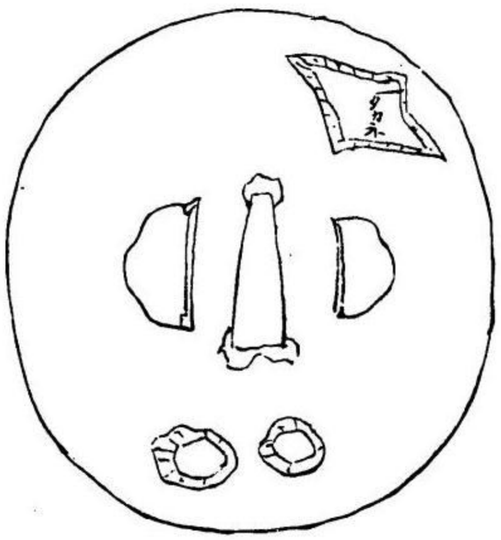
繋キ但シ地ヨリ低シ



透肉置角ナル方

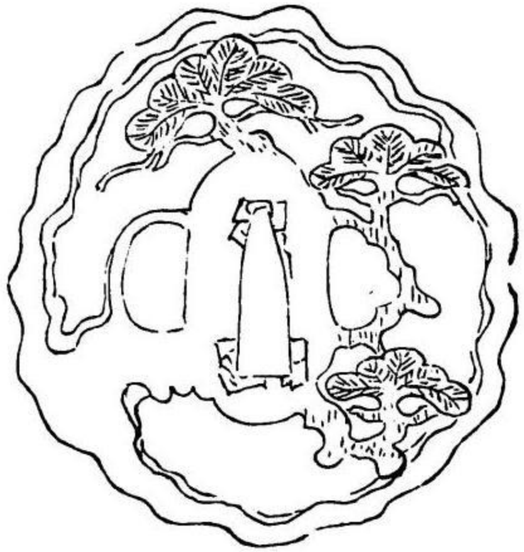


タカネ

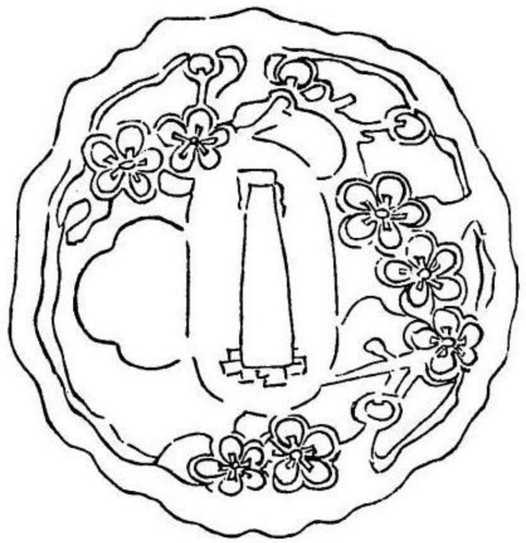


地ミカキ

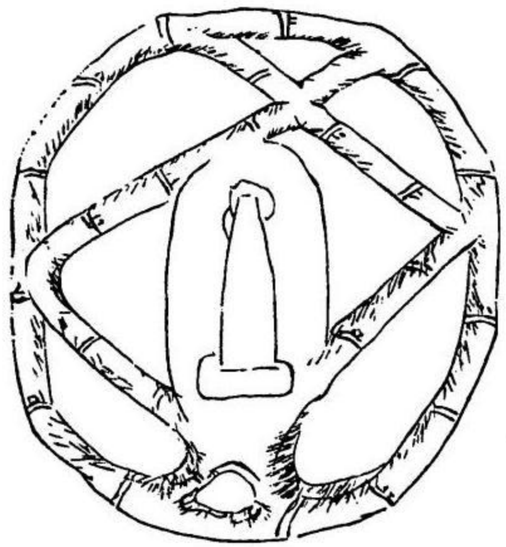
門作



門作

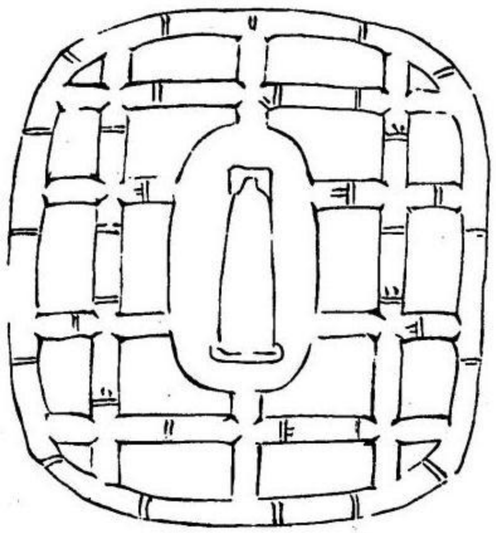


門作

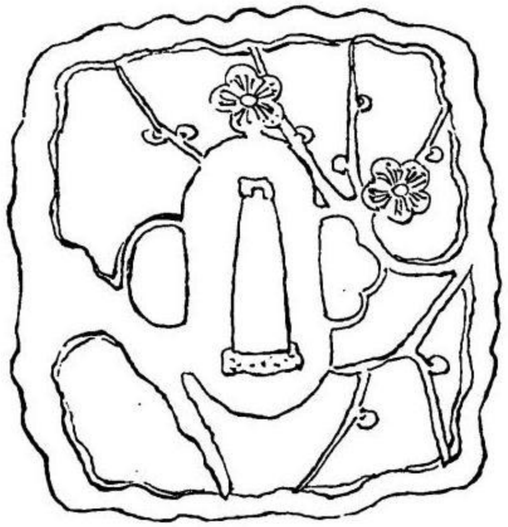


肉置九寸方但切羽台角肉

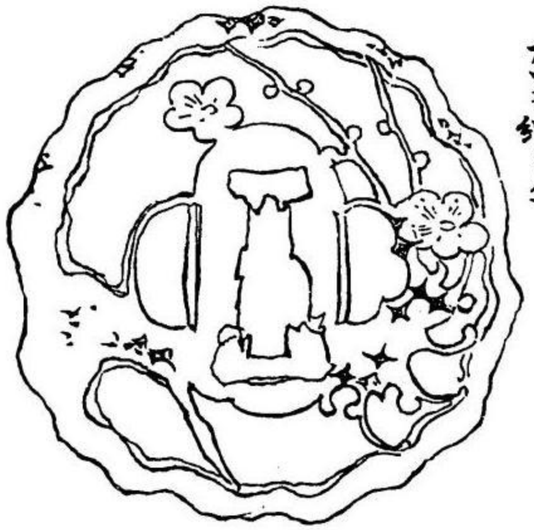
門作



肉置畧上ニ同シ



此作類之



カツラ細キ金







刀作

耳角内



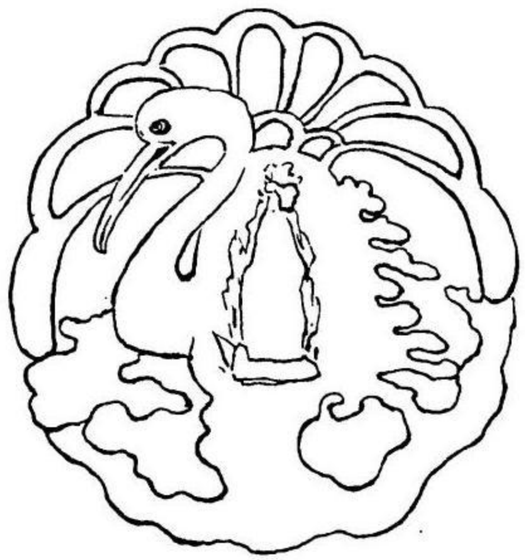
刀作

身丸内稍尖

タカネ

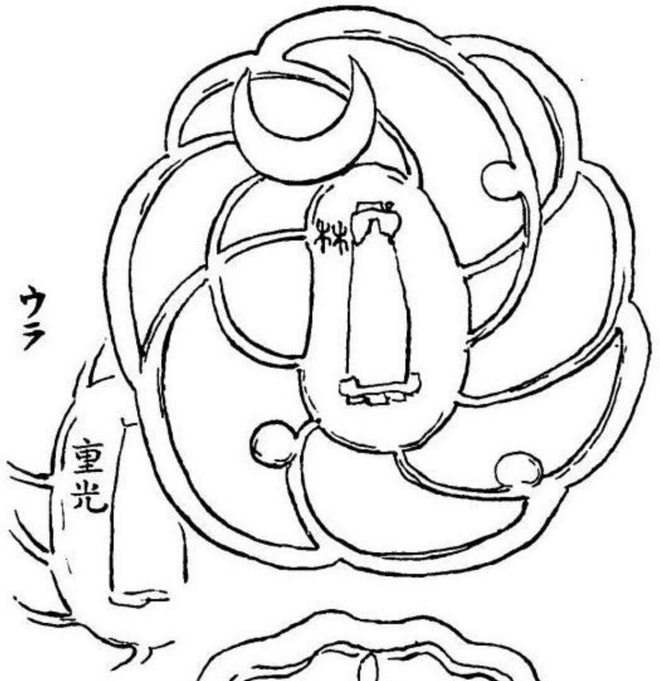


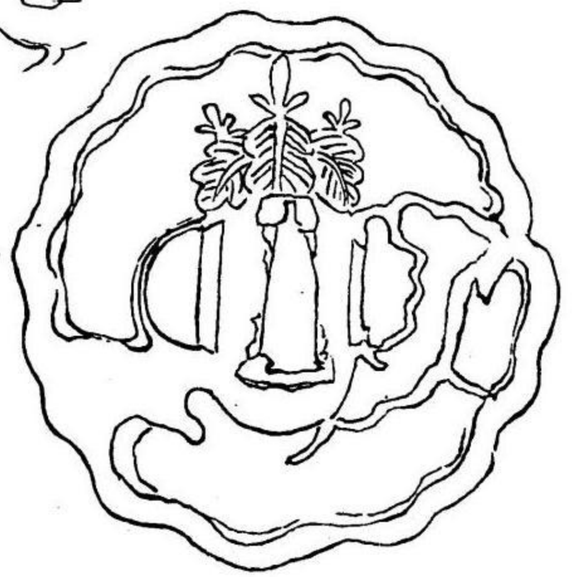
刀作



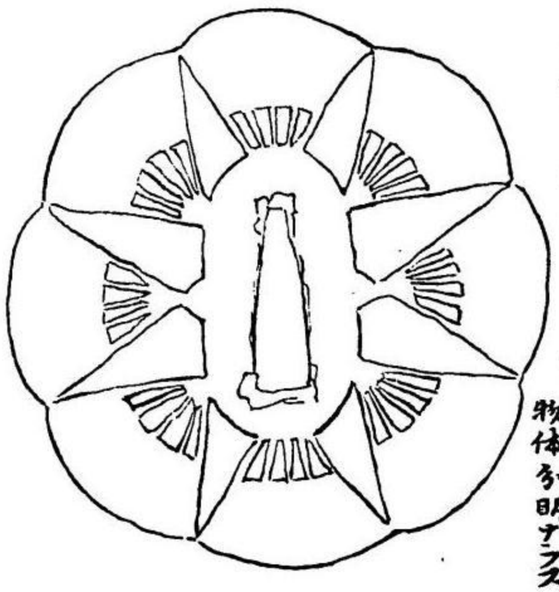
眼真鍮

春日二代目作





門作



門作

耳稍角　元金象眼アリ今ナシモノ物体ヲ明ナラス

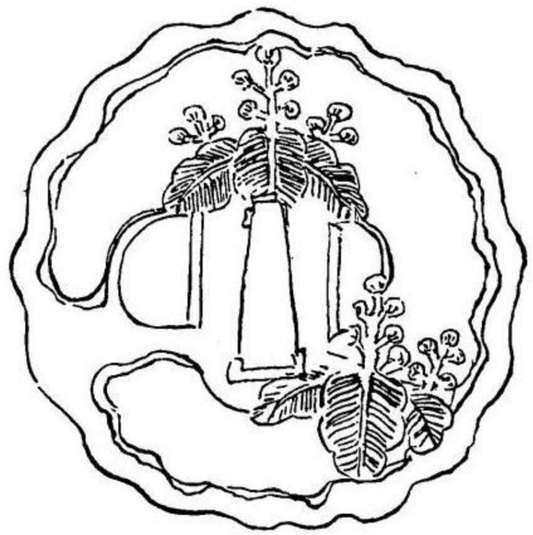
門作



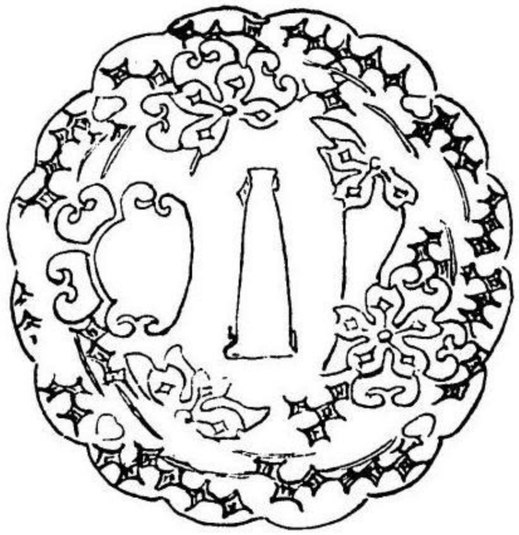


門作

耳内大ニ尖ル



門作



ウラ門

春日三代目作

櫻殿共ニ透ク菖蒲金

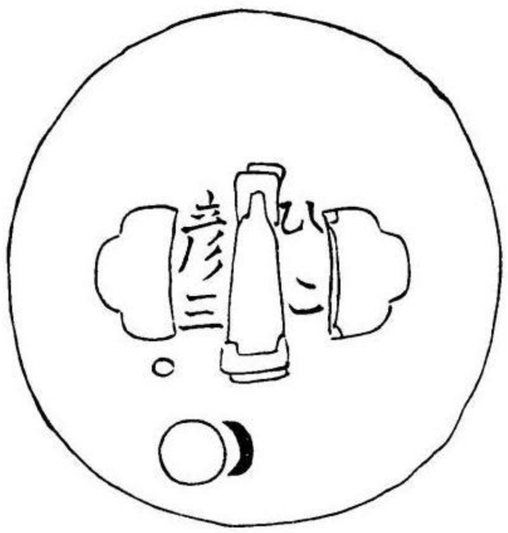


ウラ門

門作

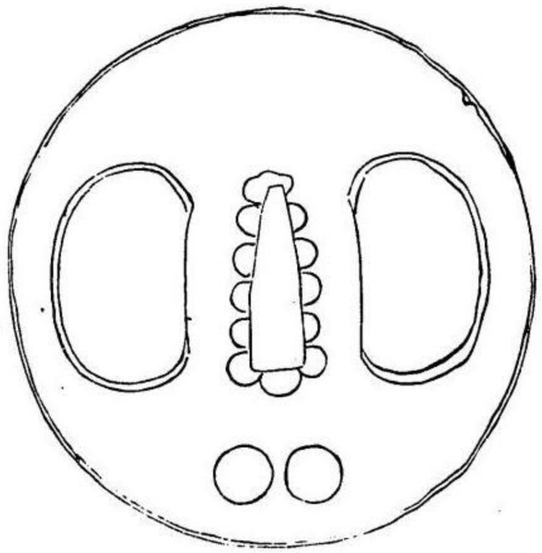
菖蒲金縄銀釘ヨリ合セ

縄外彫深シ



平田初代作

耳薄キ方　三光内日星透月彫

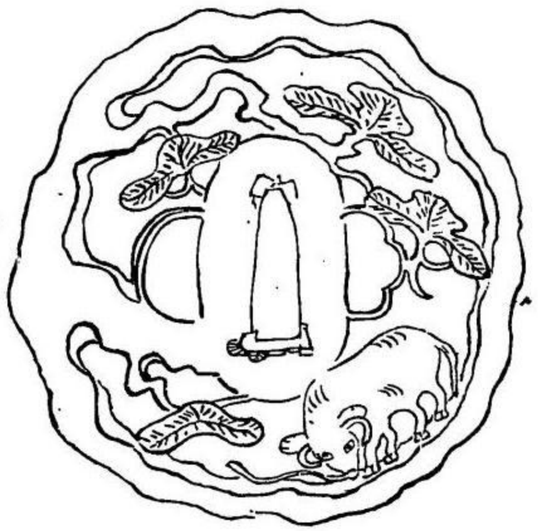


門作　鉤

耳及櫃際共ニ手透シ地ミガキ



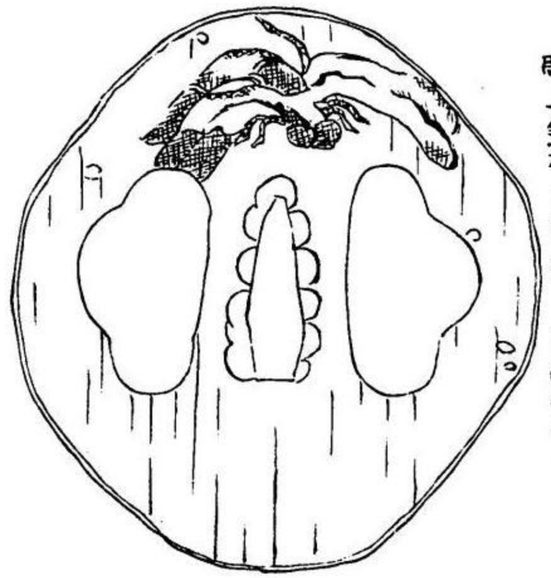
門作



門作　（初代指モノ）

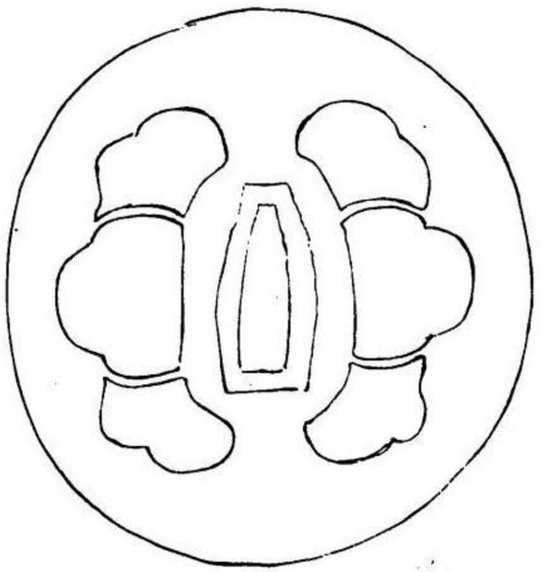
鍔作　真鍮

彫上銀布目象眼　時雨毛ボリ



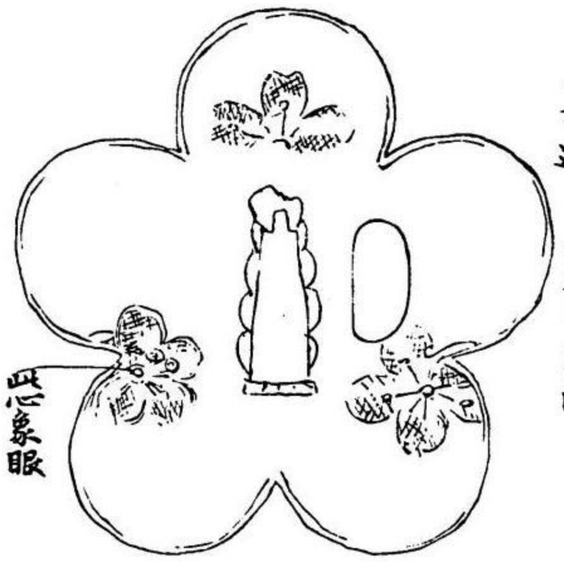
ウラ鍔但蜻蛉仰ノ

鍔作



鍔作

耳打返　金布目象眼

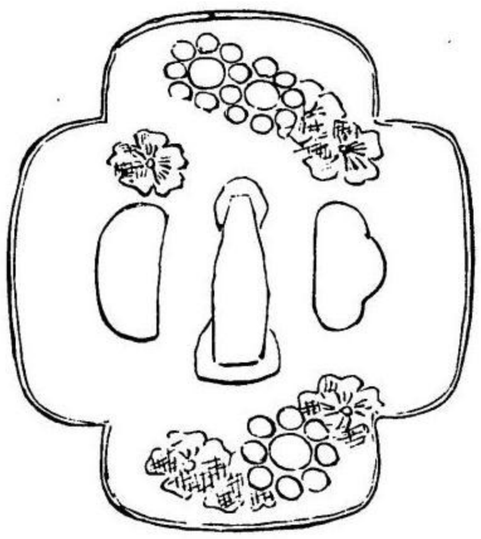


ウラ鍔

此心象眼

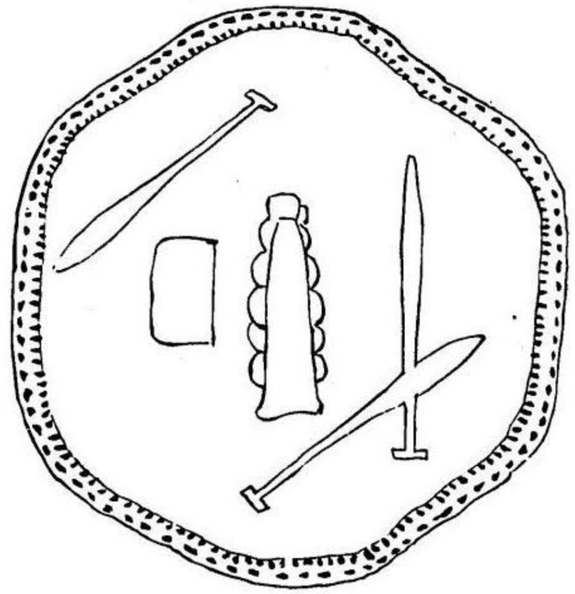
鍔作

耳打返　九曜透櫻花金銀布目



ウラ鍔

門作　鳥釼
カニ透　出雲霞輪真鍮



門作　釼
浪彫上松金ケシ込象眼



ウラ門

門作

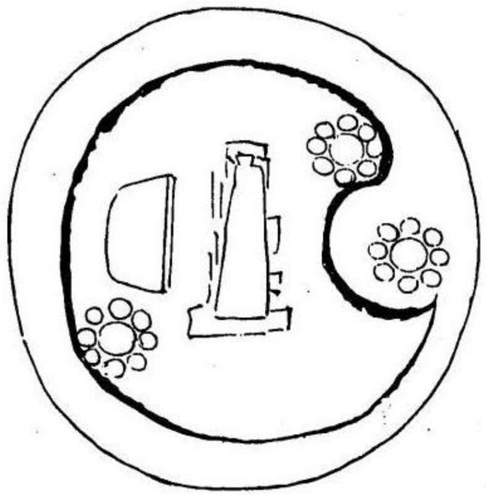
花金布目霞彫　霞輪四分一



ウラ花十三

門作

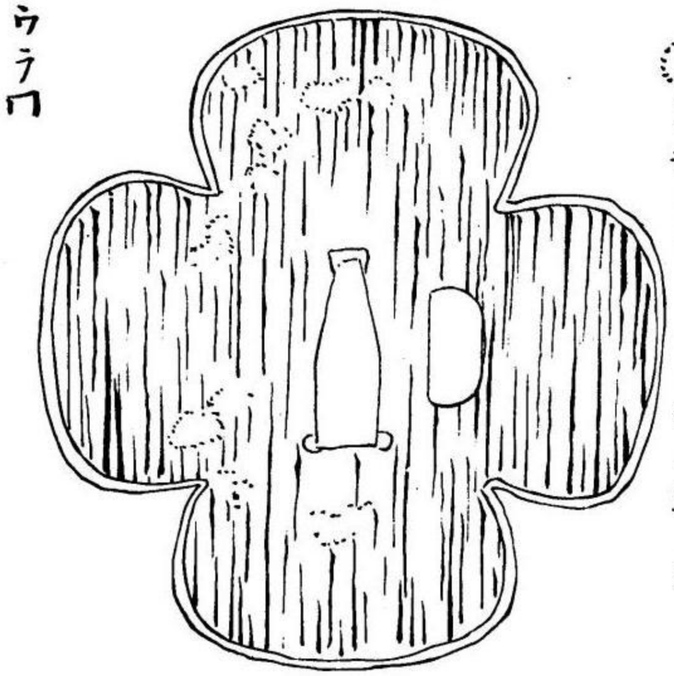
巴彫紋真鍮据物



ウラ門

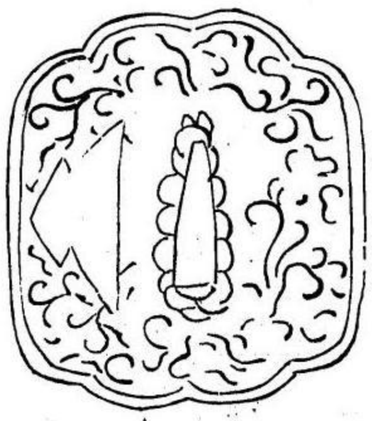
刀作

ヤキ手クサラシ　時雨彫覆輪赤銅



ウラ刀

刀作　釧

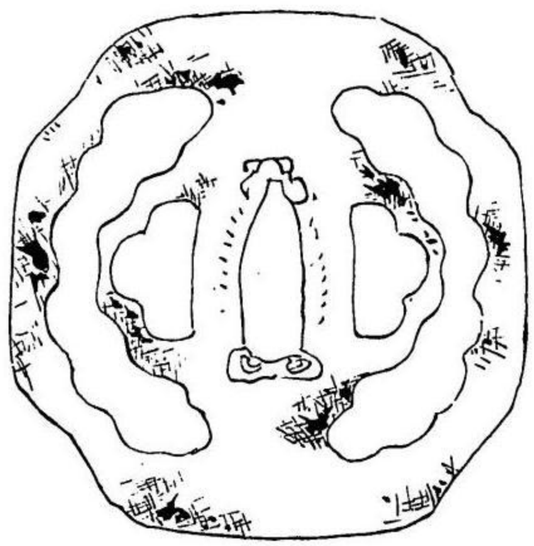


ウラ刀

象眼赤釧ホリ込
覆輪赤釧

刀作

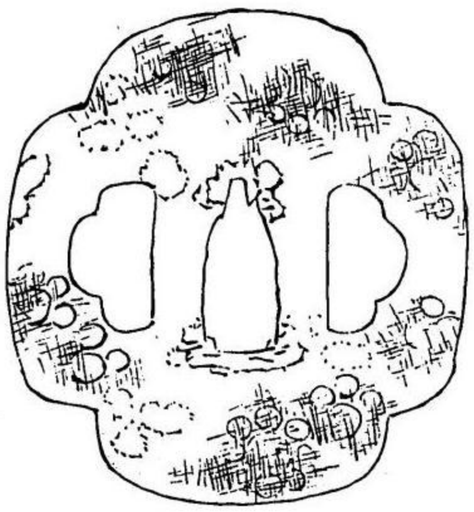
金散紙象眼



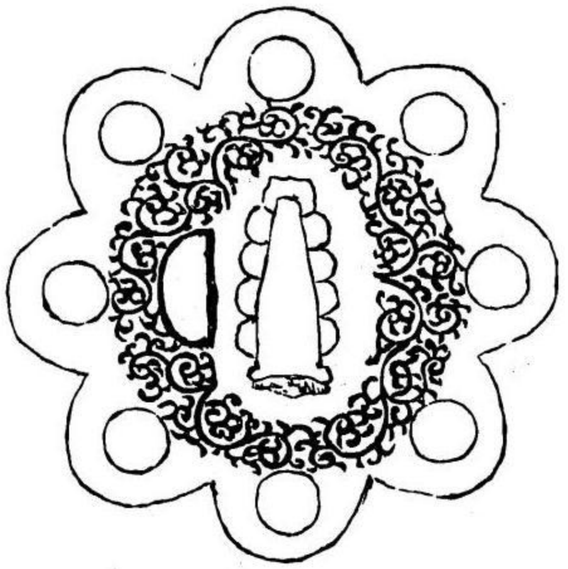
ウラ刀

刀作

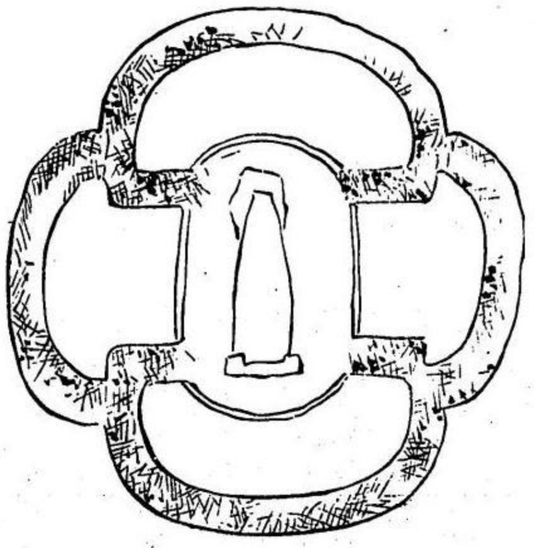
九曜銀布目



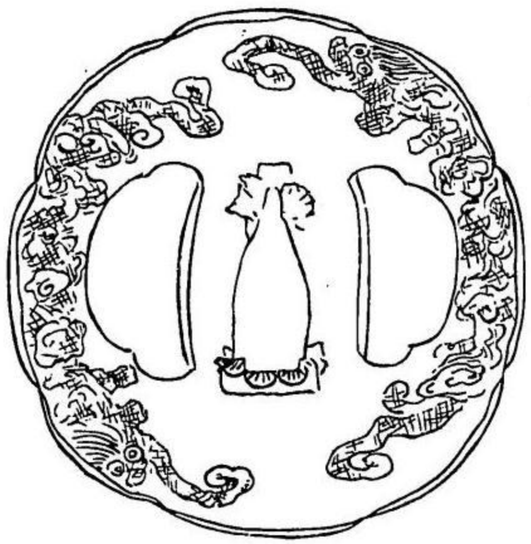
ウラ刀



刀作　赤銅
唐艸彫上



刀作
金散紙象眼



西垣初代作
眼及鬣共ニ金全身及雲銀布目



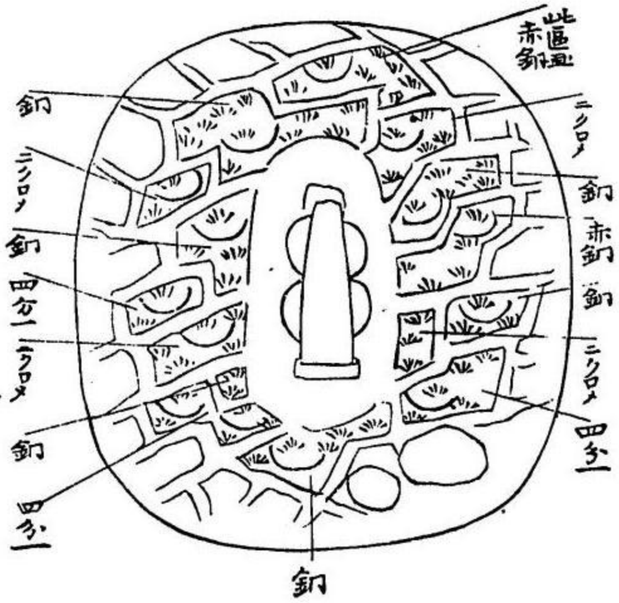
刀作裏
文字彫



門作　真鍮
唐人笠透芦赤釘据物



門作裏
花釘据物其他表ニ同シ

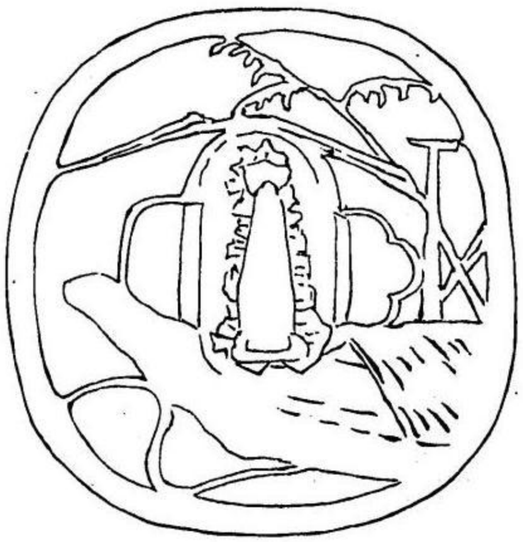


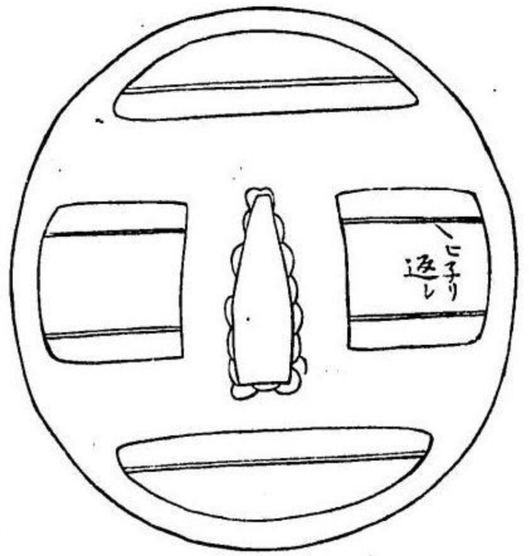
門作
月皆金

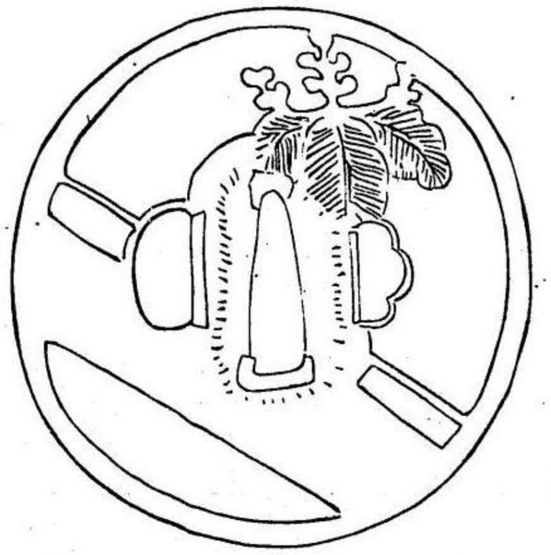


門作
松葉金象眼






ニテリ
返レ

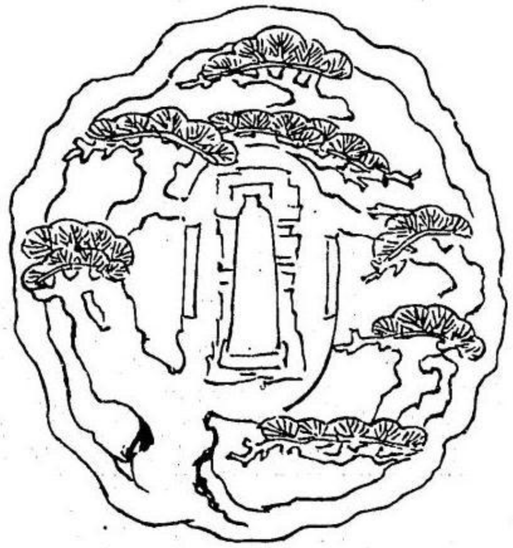


西垣二代目作

桐唐草共三金象眼

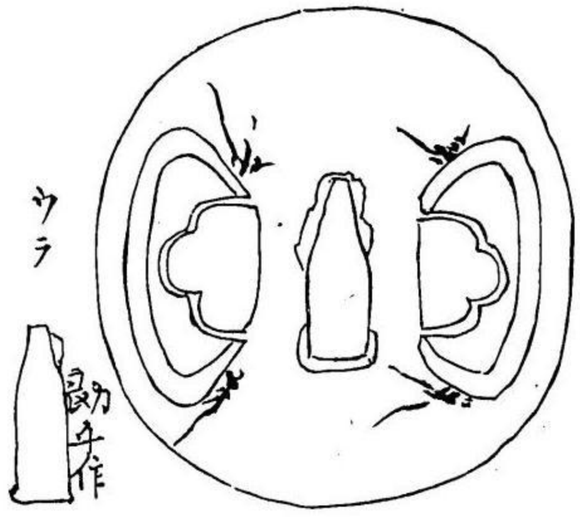


刀作



西垣勘平作

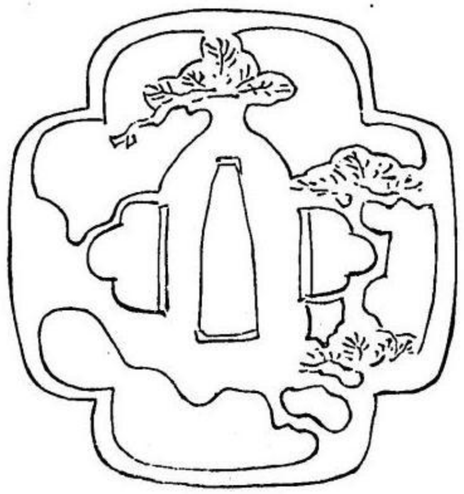
桔木金布目



ウラ

助平作

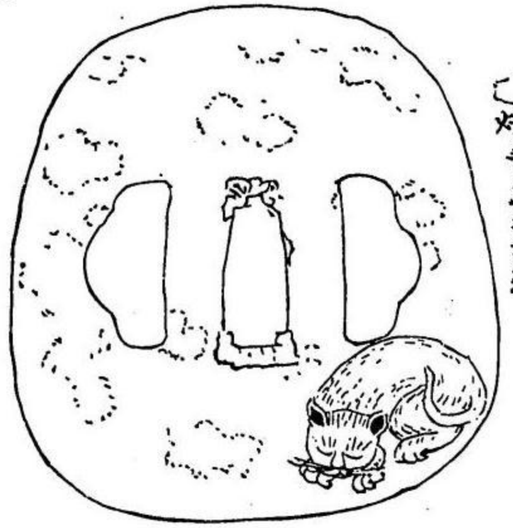
刀作



八代初代作

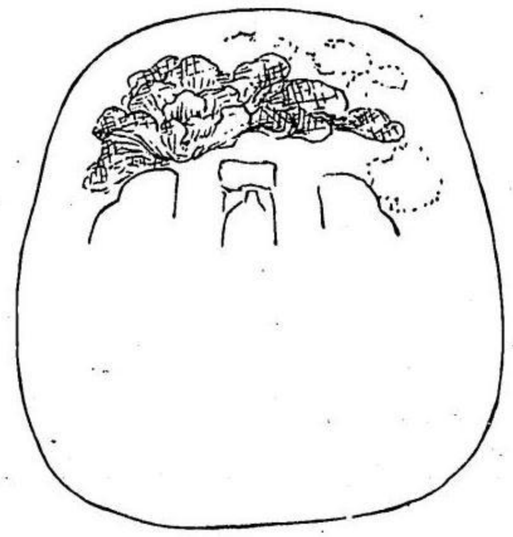
猫真鍮据物

〇焼手ノチラシ強シ



ウラ

牡丹銀布目象眼



門作

真鍮据物



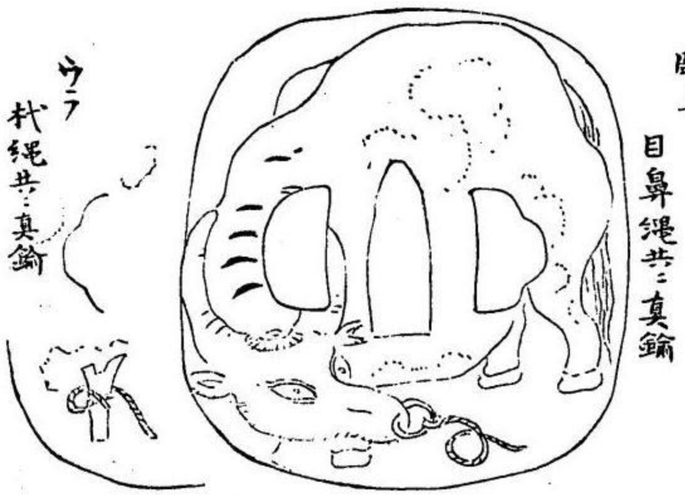
門作

彫上

目鼻縄共ニ真鍮

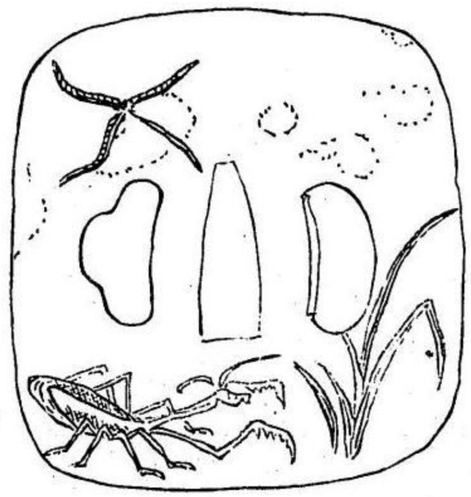
ウラ

杉縄共ニ真鍮





門作
真鍮据物



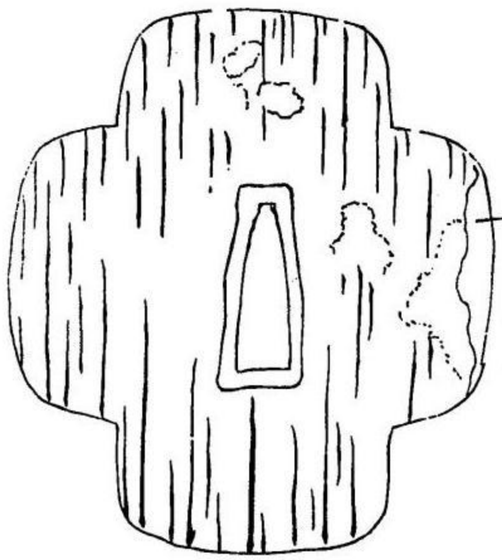
門ウラ
門据物



門作
据物真鍮流金
スリハキ
ウラ
モホリ



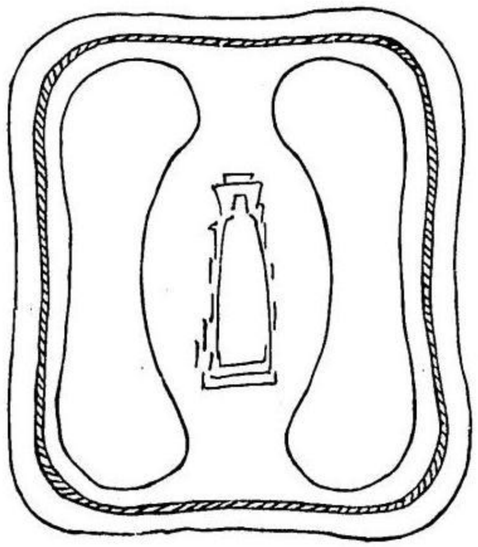
門作
蛛真鍮据物木目彫深キ方
但し片切
ウラ木目



鍔ヶ迫レ強シ

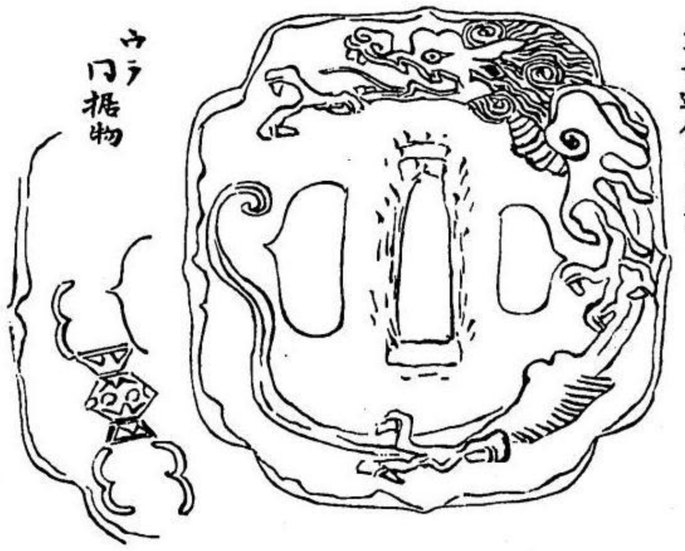
時雨ホリ

門作



縄釦ヨリ合セ

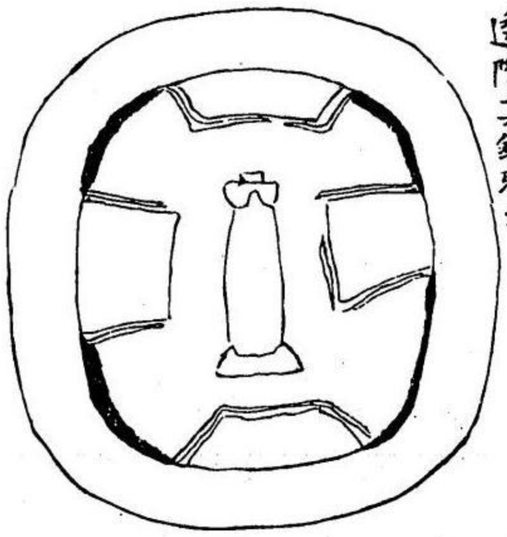
門作



ウラ
門据物

据物真鍮
耳ヲ透但耳金布目

門作

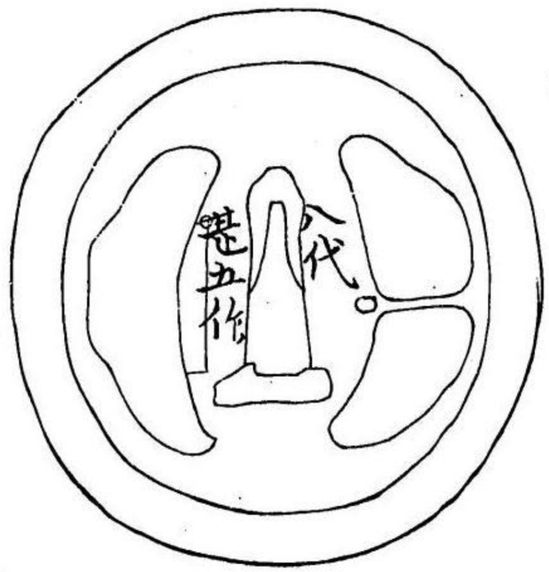


環耳スキ下ケ
透際真鍮張金

門作

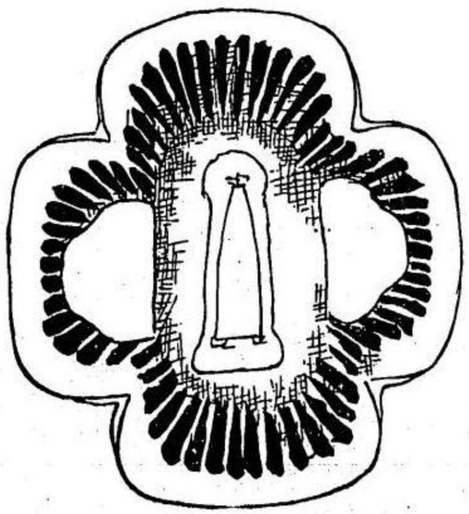
八代二代目作

環月



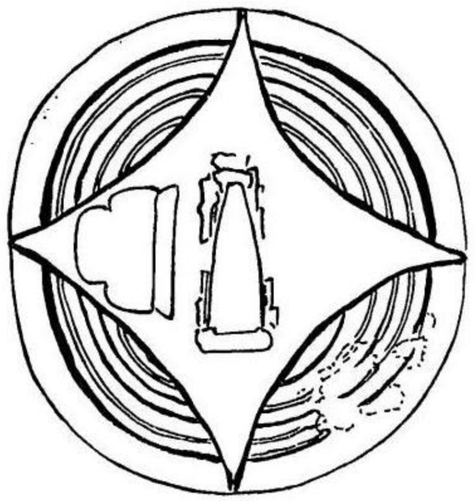
門作

スキ下ヶ菊深彫地銀布目スリハキ

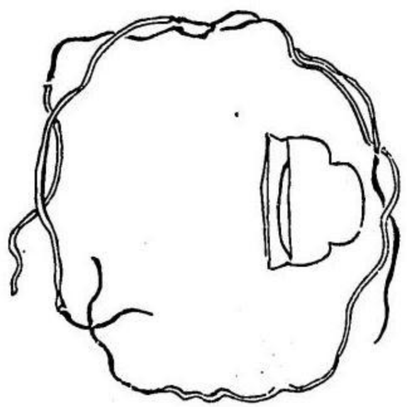


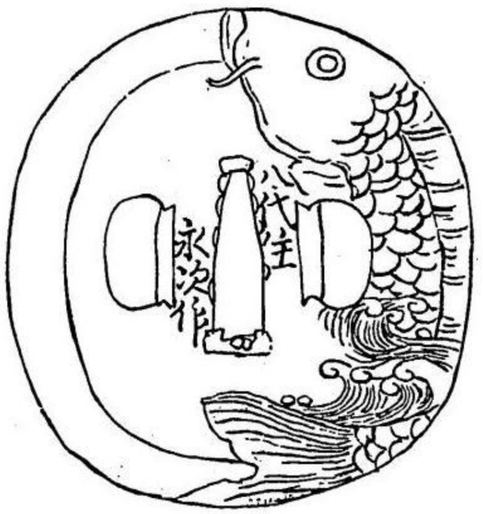
門作

環耳糸巻ホリ糸真鍮張金



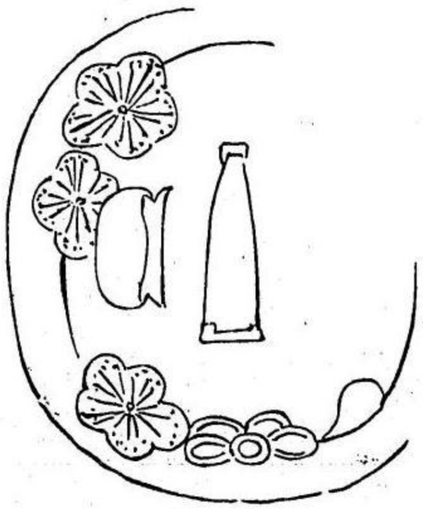
門ウラ





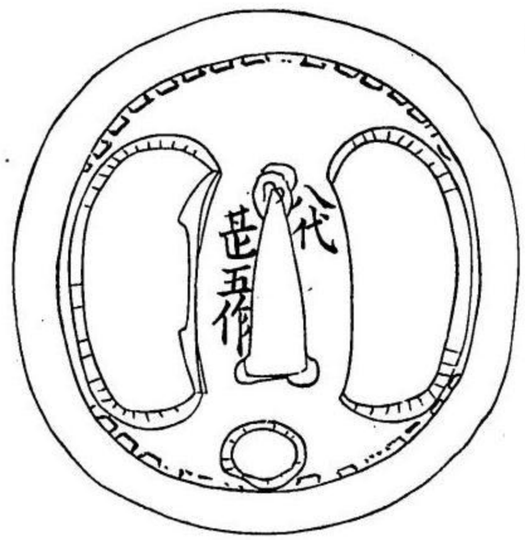
刀作 鍔

彫上



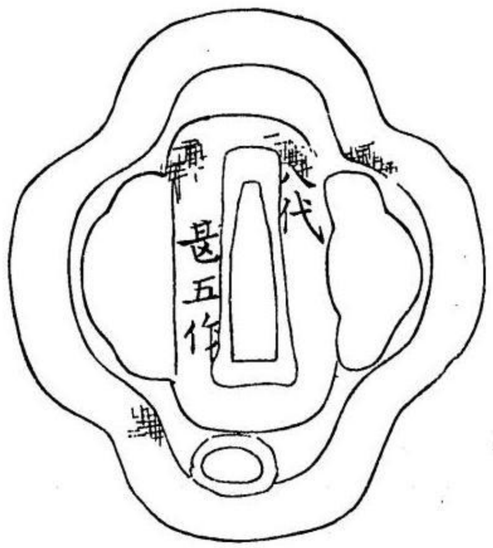
刀裏

彫刀



刀作

鍔耳スキ下ヶ象眼銀張金



刀作

銀布目スリハキ

門作

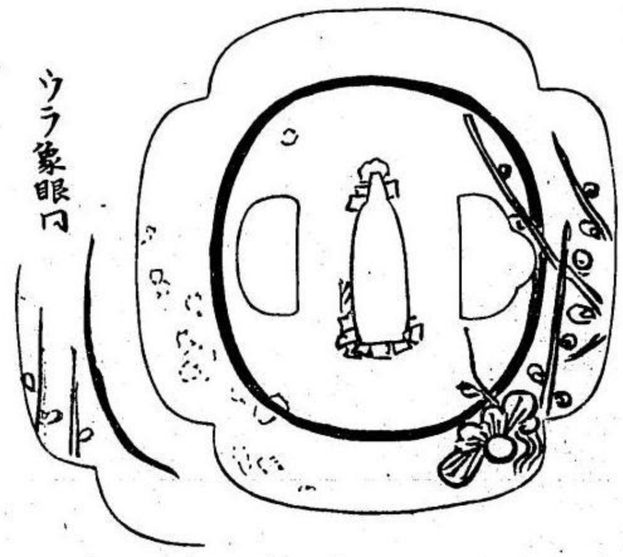
真鍮据物



門作

環耳　金張金象眼

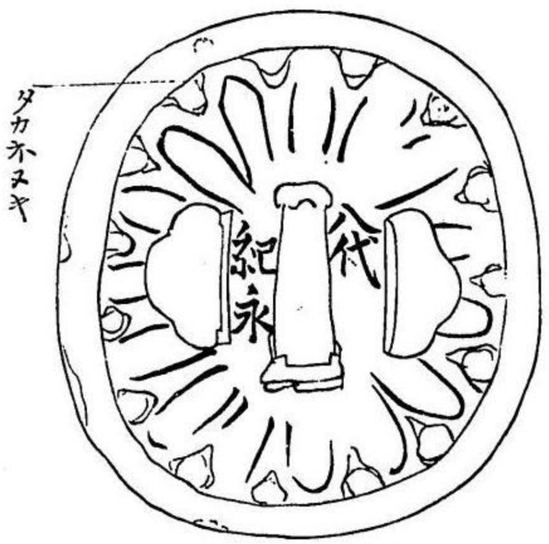
ヤヤ手



此作未詳（二代目カ）

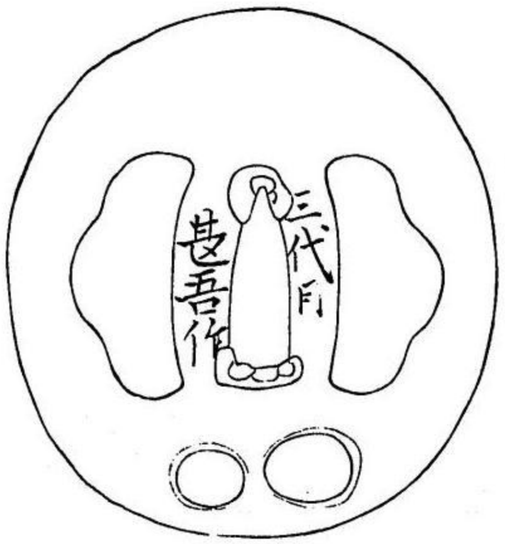
真鍮張金象眼

タカオヌキ

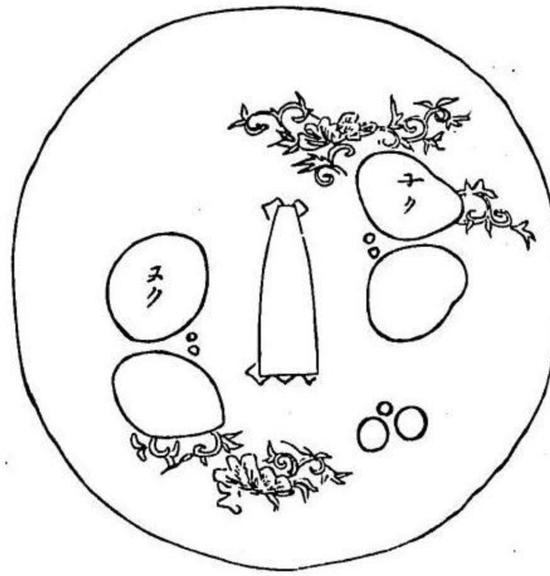


八代三代目作

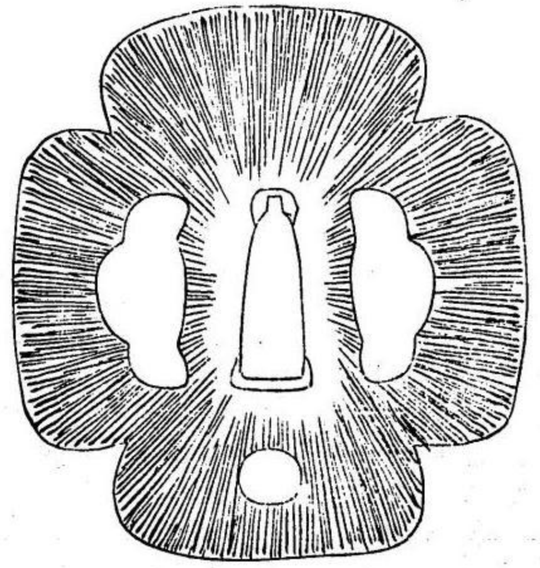
地ミガキ



神吉樂壽作



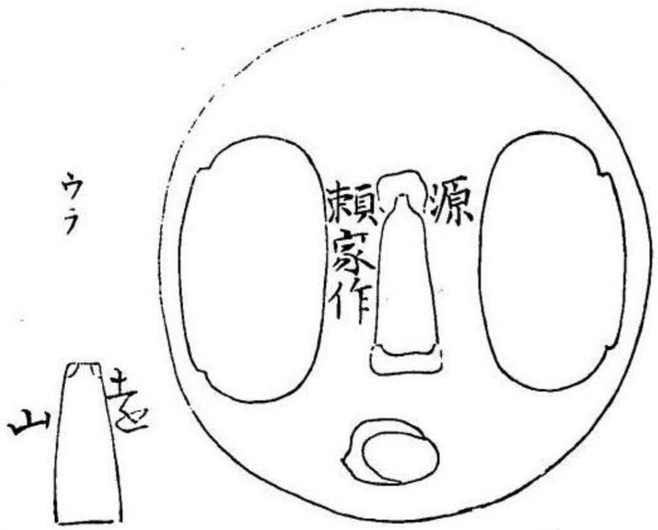
牡丹唐草金布目象眼



門作

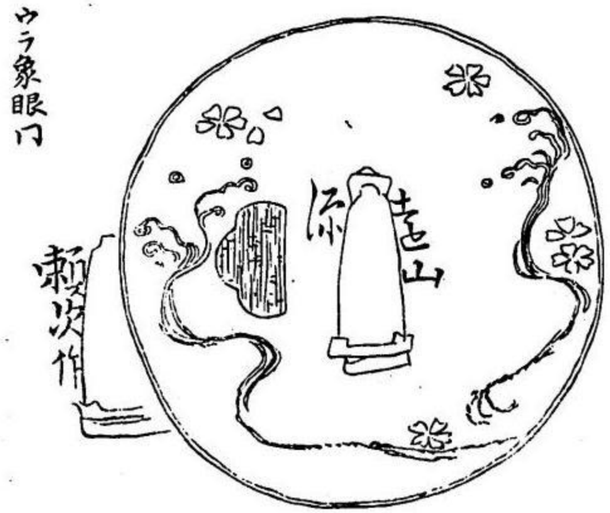
阿弥陀釘

遠山又七作



門頼次作

耳古透　櫻金布目浪銀張金



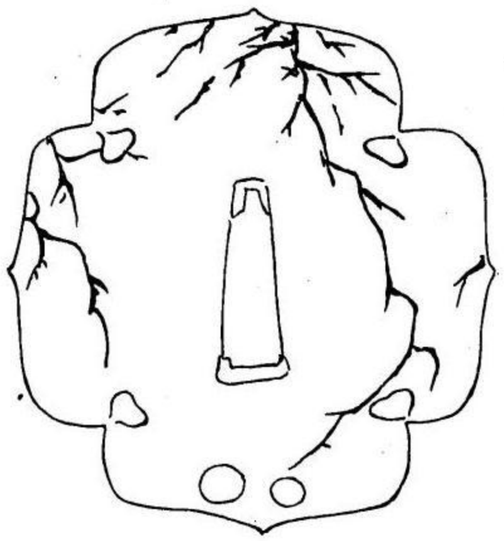
三角春信作　赤銅
環耳ミカキ地ナシ
水禽芦花彫上但鳥目金





ウラ

諏訪幾平作
枯木金布目象眼



ウラ

谷清兵衛作
紋金



1169
1557

明治三十五年十月一日印刷
明治三十五年十月五日發行

著作權所有

著者　長屋重名

發行兼印刷者　吉川半七
東京市京橋區南傳馬町一丁目十二番地

印刷所　吉川印刷工場
東京市京橋區柳町五番地

附圖終

147
157

